一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊

羽　間　遺　跡

2007．3

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局

序　　文

羽間遺跡は、一般国道32号満濃バイパス建設に伴い発掘調査を行った、香川県仲多度郡まんのう町羽間に所在する遺跡です。

調査は、香川県教育委員会からの委託を受けた財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成12年度に実施し、弥生時代後期と中世の遺構を検出しました。特に弥生時代後期の遺構には、竪穴住居跡と掘立柱建物跡で構成される小規模集落が含まれることがわかりました。とりわけ掘立柱建物跡は、同時期の県内では最大級の床面積を有し、内部に屋内棟持柱を備えた床張の可能性がある特異な構造をもち、この地域の弥生時代集落や建物の研究を進める上で、大変貴重な資料になりました。

整理作業は、財団法人の業務を引き継いだ香川県埋蔵文化財センターが平成17年12月から平成18年３月まで実施し、ここに「一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊　羽間遺跡」として刊行することになりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、関係機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年３月

香川県埋蔵文化財センター

所長　渡部　明夫

例　　言

1．本報告書は、一般国道32号満濃バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告で、香川県仲多度郡まんのう町羽間に所在する羽間遺跡（はざまいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は、予備調査を平成11年６月１日～30日、本調査を平成12年５月１日～９月30日の期間で、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

予備調査　期間：平成11年６月１日～６月30日
　　担当：主任技師・野崎隆亨、技師・松本和彦、調査技術員・豊岡多恵
本 調 査　期間：平成12年５月１日～12月31日
　　担当：主任技師・信里芳紀、技師・松岡　晶、調査技術員・秋山　亮（役職名は当時）

4．調査に当たって、下記の関係諸機関等の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
国土交通省四国地方整備局、満濃町建設課（当時）、満濃町教育委員会（当時）、羽間自治会、羽間大池水利組合

5．報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成15年度末に廃止となったため、香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は文化財専門員・宮崎哲治が行った。

6．報告書で用いる方位の北は、旧国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高は東京湾平均海水位（T.P.）を基準としている。また、遺構は基本的に下記の略号により表示している。

SB　掘立柱建物跡	SD　溝状遺構	SE　井戸跡	SH　竪穴住居跡
SK　土坑	SP　柱穴跡	SR　自然河川跡	SX　不明遺構

7．遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位m）を示している。

8．石器実測図中、平面図中の濃いトーン部分および輪郭線の周りの実線は摩滅痕を、輪郭線の周りの点線は潰れを表す。なお、現在の折損は黒く塗りつぶしている。

9．遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1993年版』による。

10．添付CD-ROM内の写真図版のビューワーは、株式会社トリワークス（http://www.kuraemon.com）『デジカメ蔵衛門2005』を使用した。

本文目次

第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査・整理の経過 …… 2
　第３節　調査・整理の体制 …… 2
第２章　立地と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　調査の成果 …… 7
　第１節　地形 …… 7
　第２節　土層序 …… 7
　第３節　遺構・遺物 …… 13
第４章　まとめ …… 38
　第１節　遺構の変遷 …… 38
　第２節　掘立柱建物跡 SB01について …… 42

挿図目次

第１図　遺跡位置図…… 1
第２図　遺跡位置及び周辺の遺跡(1/25,000)…… 4
第３図　調査区割図(1/1,500) …… 6
第４図　ＩＤ区西壁土層断面図(1/40)…… 8
第５図　ⅡＡ区西壁土層断面図(1/40) …… 9～10
第６図　ⅡＢ区北･西壁土層断面図(1/40) ……11～12
第７図　SD01断面図(1/50)、出土遺物(1/4) ……13
第８図　SH01炭化材･焼土等出土状況平面図(1/60) …14
第９図　SH01平･断面図(1/60) ……15
第10図　SH01出土遺物①(1/2、1/3、1/4) ……16
第11図　SH01出土遺物②(1/3、1/4) ……17
第12図　SH02平･断面図(1/60)、出土遺物(1/4) ……19
第13図　SB01平･断面図(1/60)、出土遺物(1/4) ……20
第14図　SK08平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4) ……21
第15図　SK14平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4) ……21
第16図　SE01平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4) ……22
第17図　SE02平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4) ……22
第18図　SD02断面図(1/50)、出土遺物(1/4) ……23
第19図　SD22断面図(1/50)、出土遺物①(1/4) ……24
第20図　SD22出土遺物②(1/4) ……25
第21図　SD22出土遺物③(1/4) ……26
第22図　SD22出土遺物④(1/4) ……27
第23図　SX07断面図(1/50)、出土遺物①(1/4) ……29
第24図　SX07出土遺物②(1/2) ……30
第25図　SR01断面図(1/50)、出土遺物(1/2) ……30
第26図　SB02平･断面図(1/60)、出土遺物(1/4) ……31
第27図　SK11平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4) ……32
第28図　SD10断面図(1/50)、出土遺物(1/5) ……32
第29図　SD13断面図(1/50)、出土遺物(1/4) ……32
第30図　SD17断面図(1/50)、出土遺物(1/4、1/5) …32
第31図　SX01出土遺物(1/4) ……33
第32図　SX04平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4) ……33
第33図　SX08断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/4、1/5)…34
第34図　SX09断面図(1/50)、出土遺物(1/4、1/5) …35
第35図　出土遺構不明の遺物(1/2、1/4、1/5) ……36
第36図　遺構変遷図①……39
第37図　遺構変遷図②……40
第38図　遺構変遷図③……41
第39図　遺構配置図……45～46

表　目　次

第１表　整理作業工程表……2
第２表　羽間遺跡周辺の遺跡……4
３表　羽間遺跡新旧遺構名対照表……44

ＣＤ目次

羽間遺跡遺構・遺物図版（蔵衛門アルバム）

画像１　遺跡遠景（南西から）（航空写真）
画像２　遺跡遠景（南西から）（航空写真）
画像３　遺跡遠景（南西から）（航空写真）
画像４　中津山丘陵上から遺跡遠景（南から）
画像５　ＩＡ・ＩＢ区完掘状況（南から）（航空写真）
画像６　ＩＡ・ＩＢ区完掘状況（西から）（航空写真）
画像７　ＩＡ・ＩＢ区完掘状況（南から）
画像８　ＩＡ・ＩＢ区完掘状況（北から）
画像９　ＩＣ・ⅡＢ区完掘状況（南から）（航空写真）
画像10　ＩＣ・ⅡＢ区完掘状況（西から）（航空写真）
画像11　ＩＣ区完掘状況（北から）
画像12　ＩＤ区完掘状況（南から）
画像13　ⅡＡ区完掘状況（南から）（航空写真）
画像14　ⅡＡ区完掘状況（南から）（航空写真）
画像15　ⅡＡ区西壁土層断面（南半部）（南東から）
画像16　ⅡＡ区西壁土層断面（北半部）（南東から）
画像17　SR02土層断面（東から）
画像18　SR03土層断面（東から）
画像19　ⅡＢ区完掘状況（北から）
画像20　ⅡＢ区西壁土層断面（南東から）
画像21　ⅡＢ区北壁土層断面（南西から）
画像22　SD01完掘状況（西から）
画像23　SD01土層断面①（西から）
画像24　SD01土層断面②（西から）
画像25　SH01検出状況①（北東から）
画像26　SH01検出状況②（南西から）
画像27　SH01炭化材等出土状況①（南西から）
画像28　SH01炭化材等出土状況②（南西から）
画像29　SH01炭化材等出土状況③（北西から）
画像30　SH01完掘状況①（南から）
画像31　SH01完掘状況②（南から）
画像32　SH01完掘状況③（南から）
画像33　SH01-K01・02検出状況（南から）
画像34　SH01-K01土層断面（東から）
画像35　SH01-K01・02完掘状況（南から）
画像36　SH02検出状況（東から）
画像37　SH02完掘状況（西から）
画像38　SH02土層断面（南から）
画像39　SB01検出状況（南から）
画像40　SB01柱痕検出状況①（南から）
画像41　SB01柱痕検出状況②（西から）
画像42　SB01完掘状況①（南から）
画像43　SB01完掘状況②（西から）
画像44　SB01（SP074）土層断面（東から）
画像45　SB01（SP075）土層断面（東から）
画像46　SB01・SH01・SH02完掘状況（南から）
画像47　SK08完掘状況（東から）
画像48　SK08土層断面（南から）
画像49　SK14完掘状況（南西から）
画像50　SK14遺物出土状況（南西から）
画像51　SK14土層断面（北東から）
画像52　SE01完掘状況（南から）
画像53　SE01土層断面（南東から）
画像54　SE02完掘状況（南から）
画像55　SE02土層断面（南東から）
画像56　SD22完掘状況（西から）
画像57　SD22土層断面（西から）
画像58　SX07土層断面（南から）
画像59　SR01完掘状況（北西から）
画像60　SR01土層断面（北西から）
画像61　SR01自然木出土状況①（北西から）
画像62　SR01自然木出土状況②（南西から）
画像63　SR01自然木出土状況③（南西から）
画像64　SB02完掘状況（北から）

画像65　SD10土層断面(南から)
画像66　SD17完掘状況(北から)
画像67　SX04土層断面(北から)
画像68　SX08完掘状況(南東から)
画像69　SX08土層断面(南東から)
画像70　SX09完掘状況(北から)
画像71　1
画像72　2
画像73　3
画像74　4
画像75　5
画像76　6
画像77　7
画像78　7
画像79　8
画像80　9
画像81　9
画像82　10
画像83　10
画像84　10
画像85　12
画像86　12
画像87　13
画像88　13
画像89　14
画像90　14
画像91　15
画像92　16
画像93　17
画像94　17
画像95　18
画像96　18
画像97　18
画像98　19
画像99　20(左)・21(右)
画像100　20(左)・21(右)
画像101　23
画像102　23
画像103　24
画像104　24
画像105　25
画像106　26
画像107　26
画像108　27
画像109　27
画像110　28
画像111　29
画像112　29
画像113　30
画像114　30
画像115　30
画像116　31
画像117　31
画像118　32
画像119　32
画像120　33
画像121　33
画像122　34
画像123　34
画像124　35
画像125　35
画像126　36
画像127　36
画像128　37
画像129　37
画像130　38
画像131　39
画像132　39
画像133　40
画像134　40
画像135　41
画像136　41
画像137　42
画像138　42
画像139　43
画像140　43
画像141　44
画像142　45
画像143　46
画像144　47
画像145　47
画像146　48
画像147　48
画像148　49
画像149　49
画像150　51
画像151　52
画像152　52
画像153　55
画像154　56
画像155　56
画像156　57
画像157　57
画像158　58
画像159　58
画像160　59
画像161　59
画像162　61
画像163　61
画像164　61
画像165　62
画像166　62
画像167　65
画像168　73
画像169　73
画像170　74
画像171　74
画像172　75
画像173　75
画像174　76
画像175　76

画像176　80
画像177　80
画像178　85
画像179　85
画像180　92
画像181　92
画像182　92
画像183　102
画像184　102
画像185　103
画像186　103
画像187　109
画像188　109
画像189　111
画像190　112
画像191　112
画像192　112
画像193　114
画像194　114
画像195　114
画像196　117
画像197　117
画像198　117
画像199　118
画像200　118
画像201　118
画像202　120
画像203　120
画像204　121
画像205　121
画像206　126
画像207　126
画像208　130
画像209　130
画像210　140
画像211　147
画像212　147
画像213　152
画像214　152
画像215　161
画像216　161
画像217　161
画像218　163
画像219　164
画像220　164
画像221　166
画像222　166
画像223　166
画像224　166
画像225　166
画像226　166
画像227　166
画像228　167
画像229　167
画像230　168
画像231　168
画像232　170(左)・171(中)・172(右)
画像233　173
画像234　173
画像235　175
画像236　175
画像237　175
画像238　176
画像239　176
画像240　193
画像241　193
画像242　196
画像243　203(左)・204(右)
画像244　203(左)・204(右)
画像245　203
画像246　203
画像247　210
画像248　210
画像249　218
画像250　218
画像251　220
画像252　221
画像253　221
画像254　221
画像255　223(左)・224(中)・225 (右)
画像256　223(左)・224(中)・225(右)
画像257　226
画像258　226
画像259　226

観　察　表

遺構配置図

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

羽間遺跡の予備調査は、香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間において平成11年４月１日付けで締結した『平成11年度　埋蔵文化財調査契約』に基づき、満濃バイパス満濃町（現まんのう町）羽間地区の予備調査として、平成11年６月１日～30日に実施した。実掘面積は417㎡である。調査方法は対象地の踏査を実施し、丘陵裾部の緩斜面や尾根頂部を中心に埋蔵文化財が包蔵される可能性がある５箇所を設定し、幅１～２ｍのトレンチ調査を行った。

調査概要は以下のとおりである。

Ａ地区　中津山北裾部に位置する緩斜面で、地目は水田である。旧地形に直交ないし平行する20本のトレンチ（計218㎡）を設定した。現地表面から検出面（にぶい黄橙色粘質土）までの深度は0.4m前後、土師器・瓦器片も数点出土している。竪穴住居跡は径６ｍ前後で、隅丸方形の平面プランを呈し、検出面から床面までの深度は0.4mを測る。ピットは総じて0.2m前後の深度である。

調査の結果、Ａ地区では弥生時代後期中葉～後葉にかけての小規模な集落が展開していることが判明した。また、瓦器・土師器に混じり古墳時代後期の遺物の出土も少量ながら認められたことから、背後に位置する安造田古墳群と関係する遺跡の存在が予想された。これらの結果をもとに、3,749㎡の範囲について文化財保護法に基づく適切な保護措置を講ずる必要があると判断され、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターによる本調査が行われることになった。

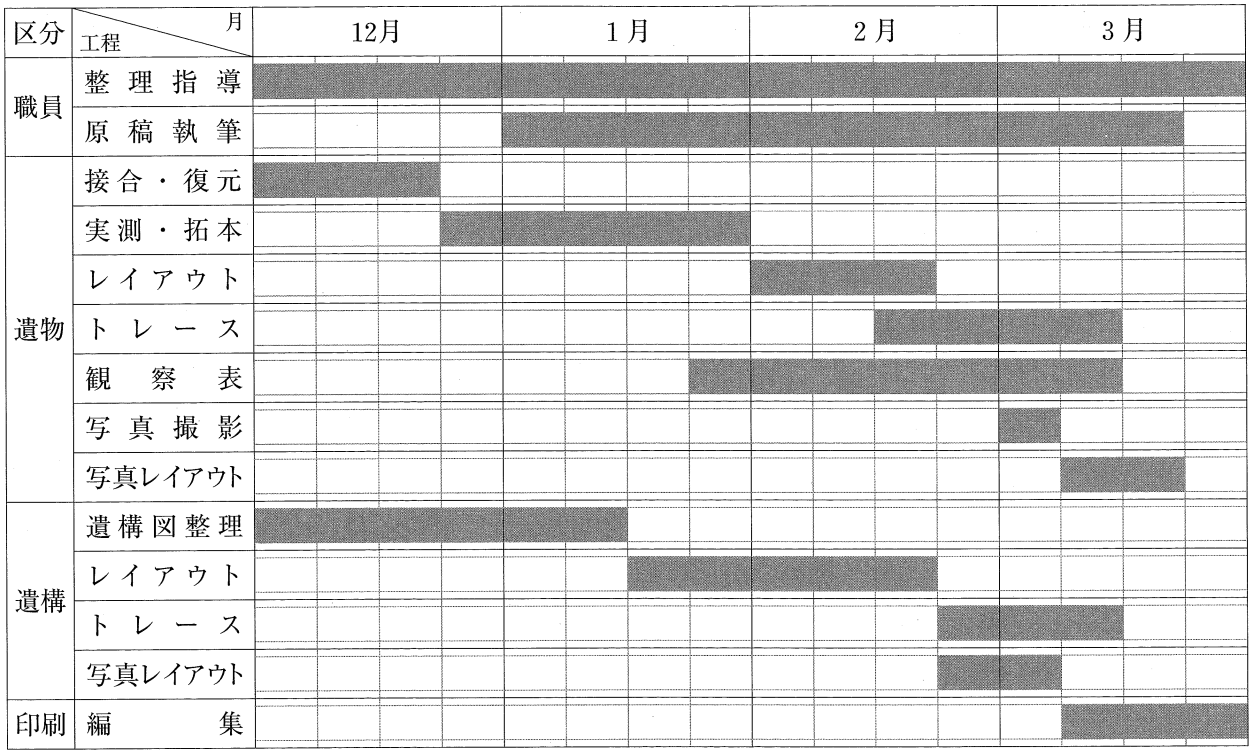
第１図　遺跡位置図

第２節　調査・整理の経過

発掘調査は、予備調査の結果を受けて香川県教育委員会と国土交通省四国地方整備局香川工事事務所の協議の結果、平成12年に本調査を実施することになり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託された。財団法人香川県埋蔵文化財調査センターは、平成12年５月１日に調査に着手し、同年９月30日に終了した。

また、調査時の成果については、平成12年８月26日の午後に開催した現地説明会にて公表した。説明会では配布資料と写真パネルを併用して遺構と遺物の解説を行い、270名にのぼる県民の参加を得た。

整理作業は、平成17年12月１日に開始し、平成18年３月31日に終了した。整理作業の工程は第１表に示すとおりである。



第１表　整理作業工程表

第３節　調査・整理の体制

平成12年度の発掘調査及び平成17年度の整理作業は以下の体制で実施した。なお、平成15年度末をもって財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが廃止となり業務が香川県埋蔵文化財センターに移行したため、整理作業は香川県埋蔵文化財センターで実施している。

調査（平成12年度）

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括　課長　北原和利
　　課長補佐　小国史郎
　　副主幹　廣瀬常雄
総務　係　長　中村禎伸

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括　所長　菅原良弘（平成12年10月31日まで）
　　小原克己（平成12年11月１日から）
　　次長　川原裕章
総務　副主幹　六車正憲

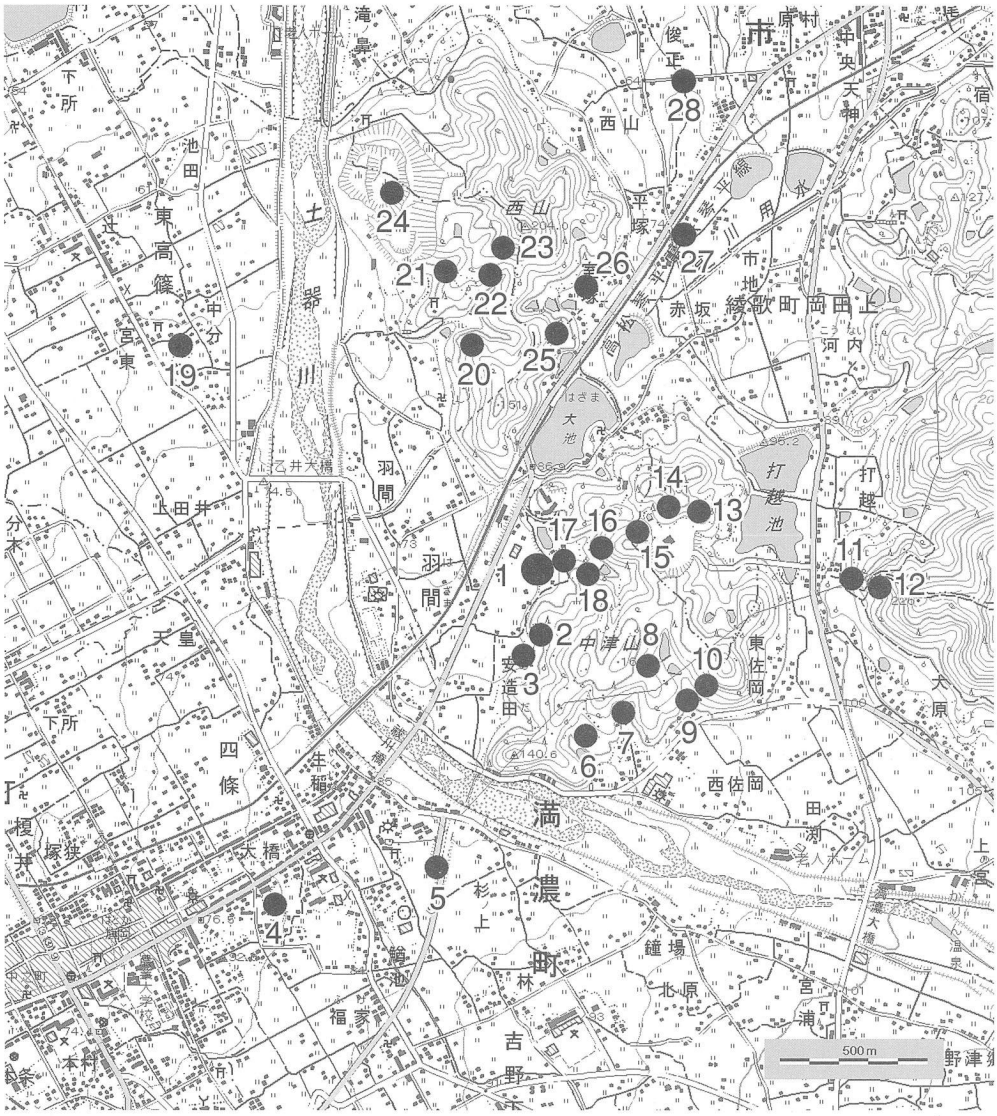
主　査　　三宅陽子
主　事　　亀田幸一
埋蔵文化財　係　長　　西岡達哉
文化財専門員　森　格也
文化財専門員　宮﨑哲治

副主幹　　大西誠治
係　長　　新　一郎
主　査　　山本和代
主任主事　高木康晴
調査　　主任文化財専門員　藤好史郎
主任技師　　信里芳紀
技　師　　松岡　晶
調査技術員　　秋山　亮
参　事　　長尾重盛

整理（平成17年度）

香川県教育委員会事務局文化行政課
総括　　課長　　吉田光成
課長補佐　　中村禎伸
総務・芸術文化グループ
副主幹　　河内一裕
主　任　　堀本由紀
主任主事　　八木秀憲
文化財グループ
課長補佐　　藤好史郎
主　任　　山下平重
文化財専門員　信里芳紀

香川県埋蔵文化財センター
総括　　所　長　　渡部明夫
次　長　　榊原正人
総務課　　課　長　　〃　（兼務）
副主幹兼係長　松崎日出穂
主　査　　塩崎かおり
主　査　　田中千晶
資料普及課
課　長　　廣瀬常雄（兼務）
文化財専門員　宮﨑哲治
臨時職員　　市川孝子
佐々木博子
岡本基公美
池内妙子
池田梨沙
北濱敦子
加藤恵子



第２図　遺跡位置及び周辺の遺跡（１/25,000）

番号	種別	遺跡名	ふりがな	所在地	時代	備考
1	集落跡	羽間遺跡	はざまいせき	仲多度郡まんのう町羽間	弥生・中世	
2	古墳	安造田神社裏古墳	あそだじんじゃうらこふん	仲多度郡まんのう町	古墳	
3	古墳	安造田神社前古墳	あそだじんじゃまえこふん	仲多度郡まんのう町	古墳	
4	寺院	弘安寺廃寺	こうあんじはいじ	仲多度郡まんのう町四条東村	古代	伝行基（あるいは智証）開基
5	集落跡	吉野下秀石遺跡	よしのしもひでいいしいせき	仲多度郡まんのう町吉野下秀石	古墳	平成５年発掘調査
6	墳墓	長尾大隅守一族の墓	ながおおおすみのかみいちぞくのはか	仲多度郡まんのう町長尾	中世	
7	寺院	佐岡寺跡	さおかてらあと	仲多度郡まんのう町長尾佐岡		
8	銅剣出土地	佐岡遺跡	さおかいせき	仲多度郡まんのう町長尾佐岡	弥生	平形銅剣出土
9	古墳	佐岡２号墳	さおか２ごうふん	仲多度郡まんのう町長尾佐岡	古墳	
10	古墳	佐岡１号墳	さおか１ごうふん	仲多度郡まんのう町長尾佐岡	古墳	
11	古墳	岡田５号石棺	おかだ５ごうせっかん	綾歌郡綾川町岡田	古墳	
12	古墳	岡田６号石棺	おかだ６ごうせっかん	綾歌郡綾川町岡田	古墳	
13	古墳	平石１号墳	ひらいし１ごうふん	綾歌郡綾川町岡田	古墳	
14	古墳	平石２号墳	ひらいし２ごうふん	綾歌郡綾川町岡田	古墳	
15	古墳	安造田東峠古墳	あそだひがしとうげこふん	仲多度郡まんのう町羽間安造田東	古墳	
16	古墳	安造田東１号墳	あそだひがし１ごうふん	仲多度郡まんのう町羽間安造田	古墳	
17	古墳	安造田東２号墳	あそだひがし２ごうふん	仲多度郡まんのう町羽間安造田	古墳	
18	古墳	安造田東３号墳	あそだひがし３ごうふん	仲多度郡まんのう町羽間安造田	古墳	平成２年発掘調査
19	城館	円浄寺陣所跡	えんじょうじじんしょあと	仲多度郡まんのう町東高篠	戦国	伝長宗我部元親陣所・天正年間
20	古墳群	出雲山古墳群	いづもやまこふんぐん	仲多度郡まんのう町羽間	古墳	
21	古墳	西山西部１号墳	にしやませいぶ１ごうふん	仲多度郡まんのう町羽間	古墳	円墳
22	古墳	西山西部２号墳	にしやませいぶ２ごうふん	仲多度郡まんのう町羽間	古墳	円墳
23	古墳	西山西部３号墳	にしやませいぶ３ごうふん	仲多度郡まんのう町羽間	古墳	円墳
24	古墳	草塚古墳	くさづかこふん	仲多度郡まんのう町長尾	古墳	消滅
25	古墳・墳墓	室塚遺跡（Ａ地区）	むろづかいせき（Ａちく）	綾歌郡綾川町室塚	弥生・古墳	平成12年発掘調査
26	集落跡	室塚遺跡（Ｂ地区）	むろづかいせき（Ｂちく）	綾歌郡綾川町室塚	弥生	平成12年発掘調査
27	城館	平塚岡田屋敷跡	ひらづかおかだやしきあと	綾歌郡綾川町岡田上平塚・西山・田中	中世	伝岡田因幡守館・応安年間
28	城館	俊正岡田屋敷跡	としまさおかだやしきあと	綾歌郡綾川町岡田上俊正・小塚	近世	伝岡田久次郎館・寛永年間

第２表　羽間遺跡周辺の遺跡

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境

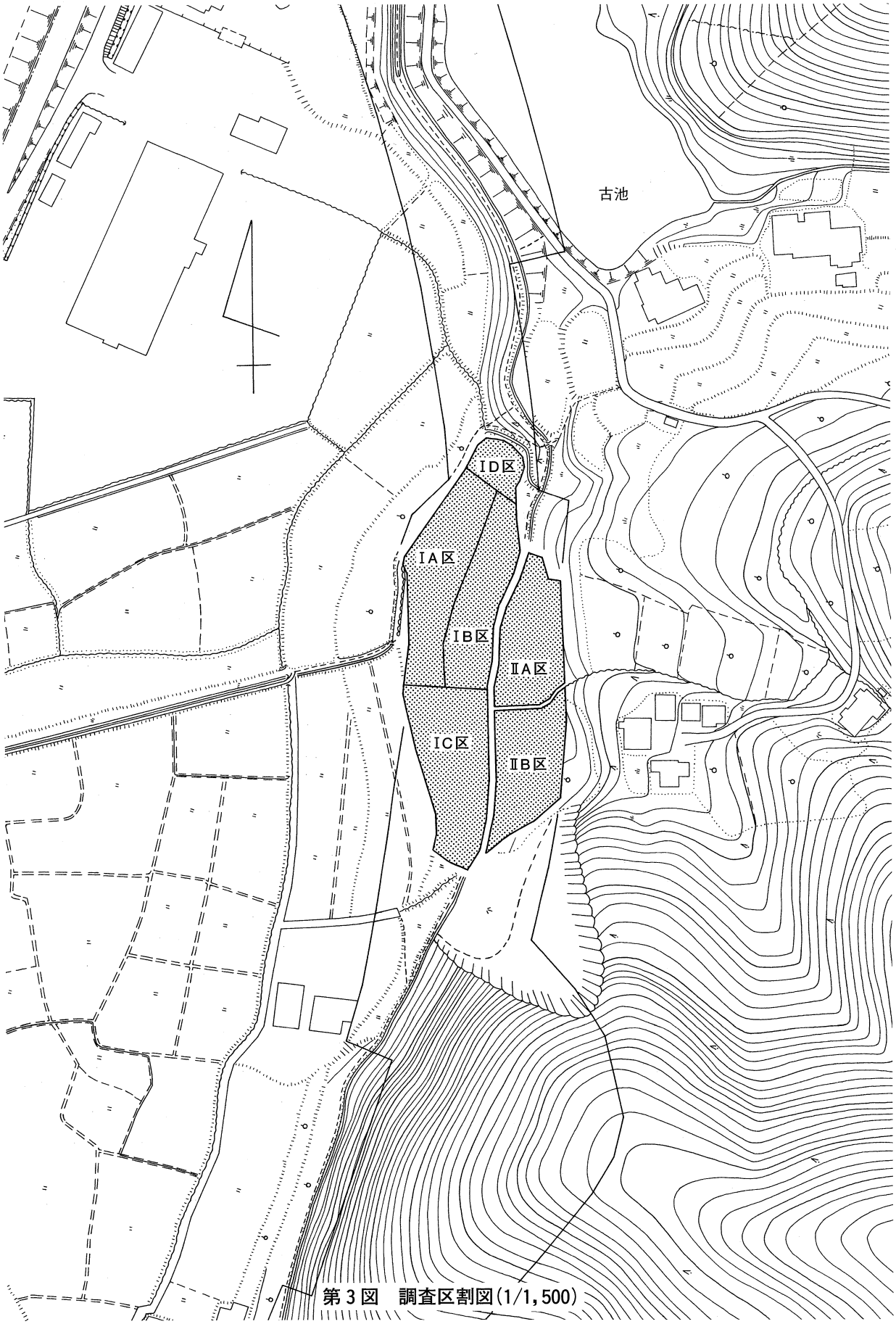
まんのう町は、平成18年３月20日に旧満濃町・旧仲南町・旧琴南町の３町が合併して誕生した町である。香川県中部（中讃地方）の南西部に位置し、東は綾川町・高松市、西は三豊市、北は丸亀市・琴平町に接している。南は標高1,000mを超える竜王山や大川山の存在する讃岐山脈を介して徳島県美馬市・三野町などに接している。讃岐山脈の北麓にあたるため、まんのう町の総面積200㎢のうちの30％を占める平野部は町域の北寄りに集中し、残りの70％を占める山地・丘陵部が南寄りに位置する地形となっている。

羽間遺跡は、まんのう町の北端部に存在する中津山の西麓、標高80m前後の地点に立地している。遺跡西方には土器川が南東から北へ方向を変えながら流下しており、土器川の西方には丸亀平野の南部が広がっている。

第２節　歴史的環境

羽間遺跡の周辺に存在する遺跡は、遺跡の立地する中津山や北方の西山上で横穴式石室を内部主体とした古墳時代後期の古墳が複数確認されている。それらの中には、１墳丘に２石室を有する佐岡１・２号墳や複室構造を持つ安造田神社前古墳、東欧の黒海北岸に類似資料のあるモザイクガラス玉が出土した安造田東３号墳などの特徴的な古墳が認められる。同時代の集落遺跡としては、土器川西岸の扇状地上に存在する吉野下秀石遺跡があげられる。古墳時代後期の竪穴住居跡９棟と掘立柱建物跡６棟が確認されており、竪穴住居跡には一辺の壁沿いに竈が作られていた。この集落を営んだ集団が、墓地として土器川対岸の中津山などを選んだ可能性は高いと考えられる。このほか、土器川西岸の平野部には白鳳時代創建とされる弘安寺廃寺や条里地割、中世の伝屋敷跡などがある。

弥生時代に関しては「羽間遺跡の所在する丸亀平野南部地域の弥生集落の様相は未だ明らかになっていない。集落では、遺跡南方に所在する町代２号墳下層の中期末から後期初頭にかけての倉庫と目される掘立柱建物跡（１間×３間　2.5×5.5m）や、遺跡対岸の吉野下秀石遺跡の後期初頭の竪穴住居跡２例などがある。しかし、地域内での集落の動態や、十分な集落構成要素を検討する材料は得られていない」と概報に記述されているように、集落遺跡はほとんど知られていない。集落遺跡以外としては「（旧）満濃町吉野神社では銅鐸片（扁平紐式か）が出土し、本遺跡の南西の中津山丘陵からは平形銅剣２口の出土が伝えられ」ているように、青銅祭器類出土地が存在しているが、「集落の実態が不明なことと合わせて、これら青銅祭器類を使用してマツリを行った集団の動向については、いまだ不明確である」と言わざるを得ないのが現状である。



第３図　調査区割図(1/1,500)

第３章　調査の成果

第１節　地形

調査は、国道32号と満濃バイパスが立体交差する地点から南へ約240ｍの付近で、延長約80ｍ、面積3,749㎡を対象として実施した。調査地は中津山西麓に当たり、巨視的に眺めれば、中津山とその西側に広がる土器川のもたらした氾濫原が接する傾斜変換点付近に存在する矮小な段丘上に立地すると言えるが、微視的に見れば、中津山の西麓には小丘陵や小開折谷が複数存在しており、調査地の内部の地形も微細な変化が見られる。

調査前の状況は、東から西に向かって傾斜する斜面地を小規模な単位に分割した水田及び畑地として土地利用がなされていたため、踏み面の幅に対して蹴上げの低い階段状に削平を被っている。調査地内には現在も使用されている水路等が存在したため、その制約から調査区を東西に２分し、西をⅠ区、東をⅡ区と設定した。さらにⅡ区は水路によって南北に分割し、Ⅰ区は土置き場の確保等の工程上の理由から４つに分割して調査を実施している。

先の微視的な地形区分と調査区との対応を見ると、ⅡＢ区南東から北西方向の小開折谷とⅡＡ区東から西方向の小開折谷が調査区中央付近で合流して西方向へ抜けている状況が想定でき、それ以外は斜面地ではあるが、比較的安定した地形が広がっていたと言えよう。

調査区南端は丘陵部が迫り出してきており、調査区北方の古池は開折谷出口部を利用した溜め池であり、また西方は先述した氾濫原が広がっていたという状況から、自然条件によって周囲を囲まれた小規模ながら完結した地形と言えよう。

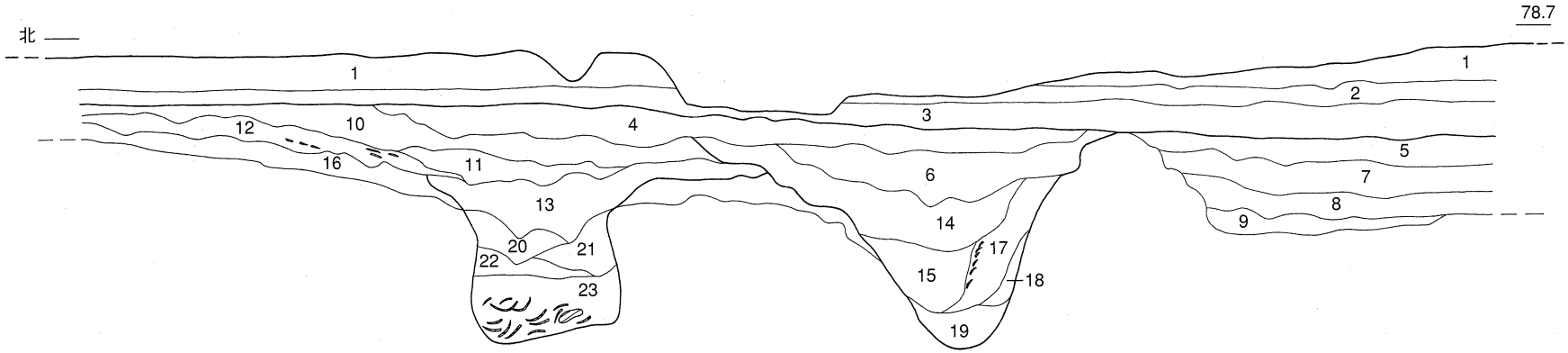
第２節　土層序

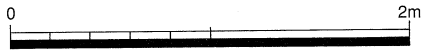
基本的な土層序は、先述したように耕作地造成による階段状の削平を受けているため、20cm程の厚さの現耕作土と床土の直下で、弥生時代及び中世の遺構面が存在している部分が大半を占める。ただし、ⅡＡ区、ⅠＤ区などのように現耕作土・床土の下位に旧耕作土・床土層が40～50cmの厚さで堆積している箇所も見られる。

弥生時代及び中世の遺構面は黄灰色粘質土を基調とした土層であり、30～80cmの厚さで堆積している。この土層の下位にはわずかに縄文土器を含んだ30cm程の厚さの黒褐色粘質土層が見られ、さらにその下に花崗岩の岩盤が存在している。

ⅡＡ区の土層断面には、弥生時代の遺構面である黄灰色粘質土中において、流水による埋没を示す粗砂やシルト層が堆積した旧河道が複数認められた。平面的な確認はできていないが、先述したⅡＡ区を東西に横切る小開折谷に伴う旧河道と判断できる。遺物の出土がないため時期の特定はできないが、土層の観察からは縄文土器を含んだ黒褐色粘質土層の堆積後から弥生時代の遺構面形成の間に流下したことがわかる。

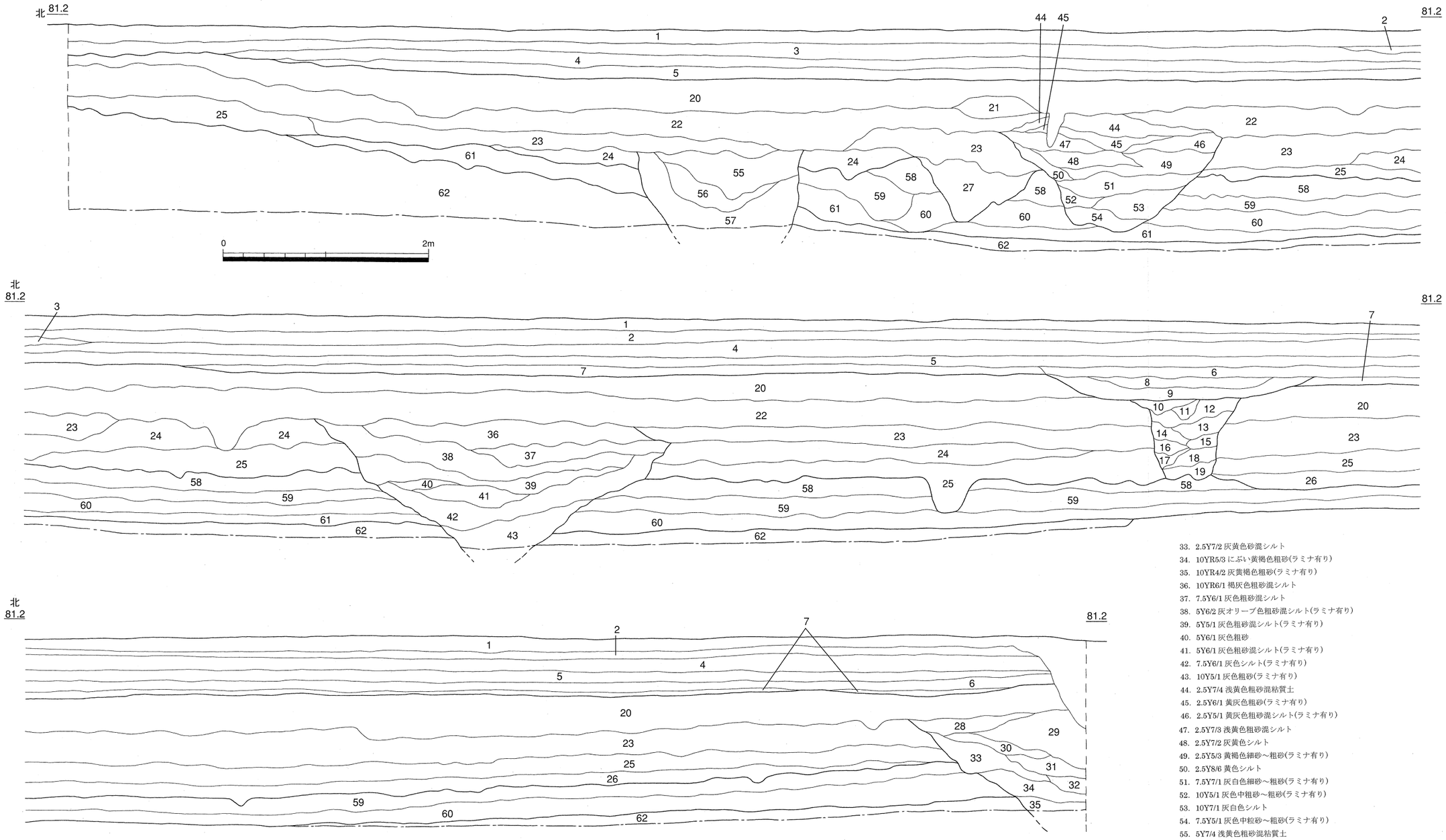
また、ⅠＤ区、ⅠＣ区、ⅡＢ区などでは黄褐色～灰褐色系の砂混じりの粘質土の堆積した谷地形状の大きな浅い落ち込み（今回はSXとして報告）が見られ、弥生時代においても当該地は凹凸地形が存在していたことが窺える。





1. 耕作土
2. 2.5Y7/1 灰白色砂混粘質土(鉄分沈着)
3. 2.5Y6/2 灰黄色砂混粘質土
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂～中粒砂(SX07 上層)
5. 2.5Y5/3 黄褐色粗砂～細砂(SX07 中層)
6. 2.5Y5/3 黄褐色粗砂～細砂(SE01 埋土)
7. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト(SX07 中層)
8. 2.5Y4/1 黄灰色砂混粘質土(SX07 下層)
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色混粘質土(SX07 下層)
10. 2.5Y6/3 にぶい黄色中粒砂～細砂(SX07 中層)
11. 2.5Y7/2 灰黄色シルト(SX07 中層)
12. 2.5Y6/1 黄灰色粗砂混シルト(SX07 中層)
13. 2.5Y7/3 浅黄色シルト(SD22 上層)
14. 2.5Y7/4 浅黄色粗砂～中粒砂(SE01 上層)
15. 2.5Y7/6 明黄褐色粗砂(SE01 上層)
16. 2.5Y4/1 黄灰色粗砂混粘質土(SX07 下層)
17. 2.5Y4/1 黄灰色粗砂混粘質土(SE01 下層)
18. 2.5Y5/1 黄灰色粗砂シルト(SE01 下層)
19. 5B5/1 青灰色粘土(SE01 最下層)
20. 5Y7/3 浅黄色粗砂混シルト(SD22 下層)
21. 5Y7/4 浅黄色粗砂混シルト(SD22 下層)
22. 5Y5/1 灰色粗砂混粘質土（SD22 最下層）
23. 5Y4/1 灰色粗砂混粘質土（SD22 最下層）

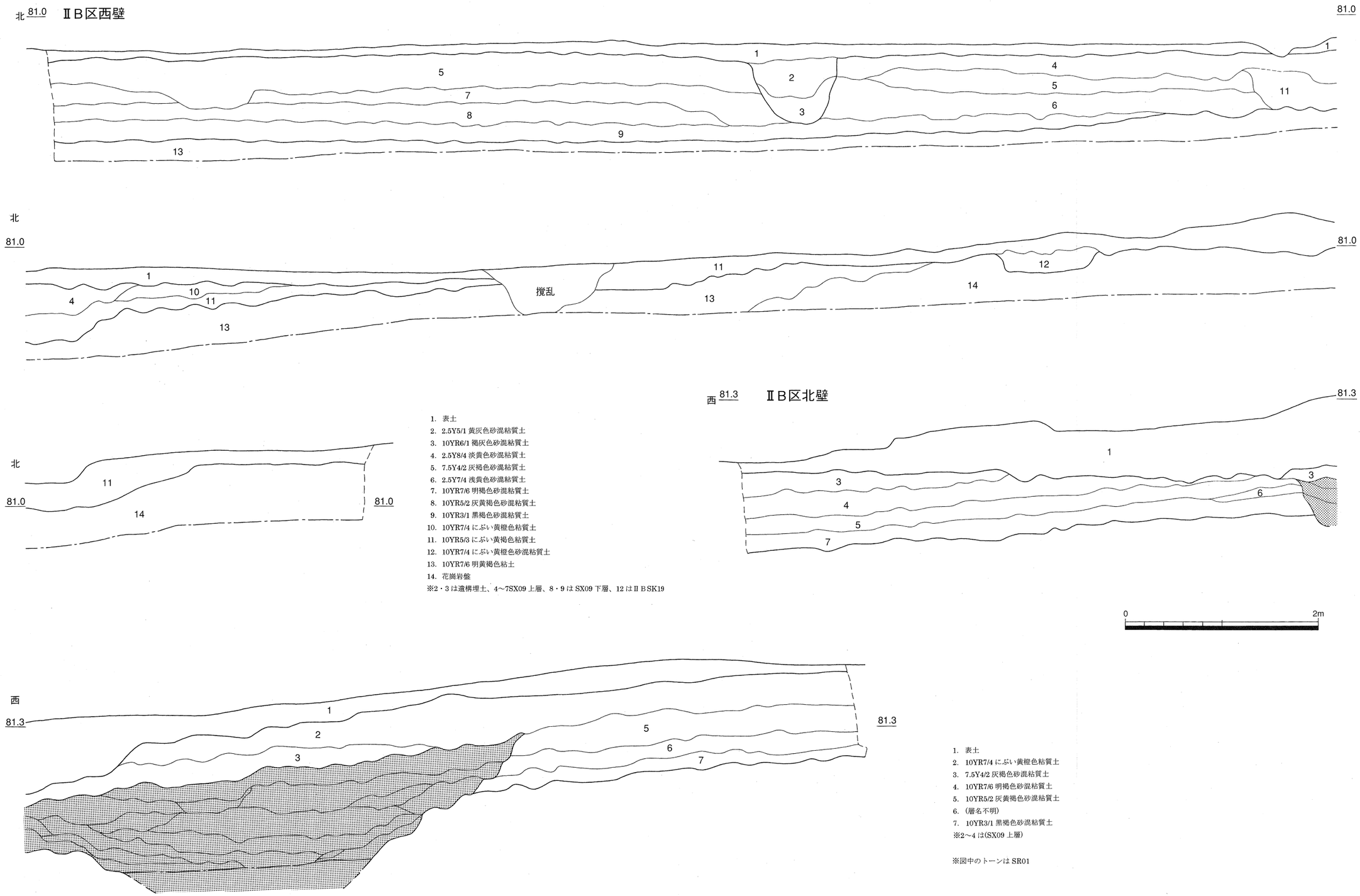
第４図　ＩＤ区西壁土層断面図(1/40)



1. 現耕作土
2. 5Y8/3 浅黄色砂混粘質土(鉄分沈着・旧耕作土)
3. 2.5Y8/4 浅黄色砂混粘質土(鉄分沈着・旧耕作土)
4. 2.5Y7/4 浅黄色砂混粘質土(鉄分沈着・旧耕作土)
5. 2.5Y8/6 黄色砂混粘質土(マンガン沈着・造成土)
6. 2.5Y6/1 黄灰色砂混粘質土(鉄分沈着・旧耕作土)
7. 2.5Y7/3 浅黄色砂混粘質土(マンガン沈着)
8. 2.5Y7/4 浅黄色砂混粘質土(マンガン沈着)
9. 2.5Y5/1 黄灰色砂混粘質土
10. 2.5Y6/2 灰黄色砂混粘質土（SD01 上層）
11. 2.5Y8/3 淡黄色砂混粘質土（SD01 上層）
12. 2.5Y5/1 黄灰色砂混粘質土（SD01 中層）
13. 2.5Y4/1 黄灰色砂混粘質土（SD01 中層）
14. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂混粘質土（SD01 中層）
15. 5Y4/1 灰色砂混シルト（SD01 中層）
16. 2.5Y7/4 浅黄色粘土ブロック（SD01 下層・崩落土）
17. 2.5Y7/4 浅黄色粘土ブロック（SD01 下層・崩落土）
18. 2.5Y3/1 黒褐色砂混シルト（SD01 下層）
19. 2.5Y6/1 黄灰色粗砂～中粒層(ラミナ有り・SD01 最下層)
20. 2.5Y7/6 明黄褐色砂粗粘質土(上面にて弥生～中世遺構を検出)
21. 10YR4/2 灰黄褐色粗砂
22. 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂混粘質土
23. 2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂混粘質土
24. 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂混シルト
25. 2.5Y7/2 灰黄色砂混シルト
26. 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂混シルト
27. 2.5Y7/4 浅黄色粗砂混粘質土
28. 7.5Y6/2 灰オリーブ色粗砂混粘質土
29. 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂混シルト(ラミナ有り)
30. 2.5Y8/4 淡黄色砂混シルト
31. 10YR6/4 にぶい黄橙色粗混シルト(ラミナ有り)
32. 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂(ラミナ有り)
33. 2.5Y7/2 灰黄色砂混シルト
34. 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂(ラミナ有り)
35. 10YR4/2 灰黄褐色粗砂(ラミナ有り)
36. 10YR6/1 褐灰色粗砂混シルト
37. 7.5Y6/1 灰色粗砂混シルト
38. 5Y6/2 灰オリーブ色粗砂混シルト(ラミナ有り)
39. 5Y5/1 灰色粗砂混シルト(ラミナ有り)
40. 5Y6/1 灰色粗砂
41. 5Y6/1 灰色粗砂混シルト(ラミナ有り)
42. 7.5Y6/1 灰色シルト(ラミナ有り)
43. 10Y5/1 灰色粗砂(ラミナ有り)
44. 2.5Y7/4 浅黄色粗砂混粘質土
45. 2.5Y6/1 黄灰色粗砂(ラミナ有り)
46. 2.5Y5/1 黄灰色粗砂混シルト(ラミナ有り)
47. 2.5Y7/3 浅黄色粗砂混シルト
48. 2.5Y7/2 灰黄色シルト
49. 2.5Y5/3 黄褐色細砂～粗砂(ラミナ有り)
50. 2.5Y8/6 黄色シルト
51. 7.5Y7/1 灰白色細砂～粗砂(ラミナ有り)
52. 10Y5/1 灰色中粗砂～粗砂(ラミナ有り)
53. 10Y7/1 灰白色シルト
54. 7.5Y5/1 灰色中粒砂～粗砂(ラミナ有り)
55. 5Y7/4 浅黄色粗砂混粘質土
56. N5/灰色中粒砂～粗砂(ラミナ有り)
57. N6/灰色粗砂(ラミナ有り)
58. 5Y3/1 オリーブ黒色粗砂混粘質土
59. 2.5Y3/2 黒褐色粗砂混粘質土
60. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗砂混粘質土
61. 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂混粘質土
62. 10YR7/6 明黄褐粘土

※8・9 は SX02 埋土、10～19 は SD01 埋土、28～35 は SR01、36～43 は SR02、44～54 は SR03、55～57 は SR04、58～61 縄文期

第５図　Ⅱ A 区西壁土層断面図(1/40)



1. 表土
2. 2.5Y5/1 黄灰色砂混粘質土
3. 10YR6/1 褐灰色砂混粘質土
4. 2.5Y8/4 淡黄色砂混粘質土
5. 7.5Y4/2 灰褐色砂混粘質土
6. 2.5Y7/4 浅黄色砂混粘質土
7. 10YR7/6 明褐色砂混粘質土
8. 10YR5/2 灰黄褐色砂混粘質土
9. 10YR3/1 黒褐色砂混粘質土
10. 10YR7/4 にぶい黄橙色粘質土
11. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土
12. 10YR7/4 にぶい黄橙色砂混粘質土
13. 10YR7/6 明黄褐色粘土
14. 花崗岩盤

※2・3は遺構埋土、4～7SX09 上層、8・9は SX09 下層、12はⅡBSK19

1. 表土
2. 10YR7/4 にぶい黄橙色粘質土
3. 7.5Y4/2 灰褐色砂混粘質土
4. 10YR7/6 明褐色砂混粘質土
5. 10YR5/2 灰黄褐色砂混粘質土
6. (層名不明)
7. 10YR3/1 黒褐色砂混粘質土

※2～4は(SX09 上層)

※図中のトーンは SR01

第6図　ⅡB区北・西壁土層断面図(1/40)

第３節　遺構・遺物

今回の調査では、縄文時代後期・弥生時代後期後半～古墳時代前期・鎌倉時代等の遺構・遺物を検出した。縄文時代後期の遺物は僅少であり、弥生時代の溝状遺構内及び弥生時代遺構面の基盤層中から出土しているのみである。確実に当該期に属する遺構は認められないことから、遺跡の東方に位置する中津山の丘陵上から流入した遺物とみなすこともでき、周辺に当該期の遺跡が展開する可能性がある。

弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺構は、概ね調査地の西半に当たるＩ区（特にＩ区北半）に多く見られ、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝状遺構などを検出した。また、鎌倉時代の遺構は調査地の南西隅付近で掘立柱建物跡、溝状遺構を、調査地中央付近で溝状遺構を検出したが、遺構の数は前代よりも少ない。以下、弥生時代後期～古墳時代前期、鎌倉時代の順に報告する。

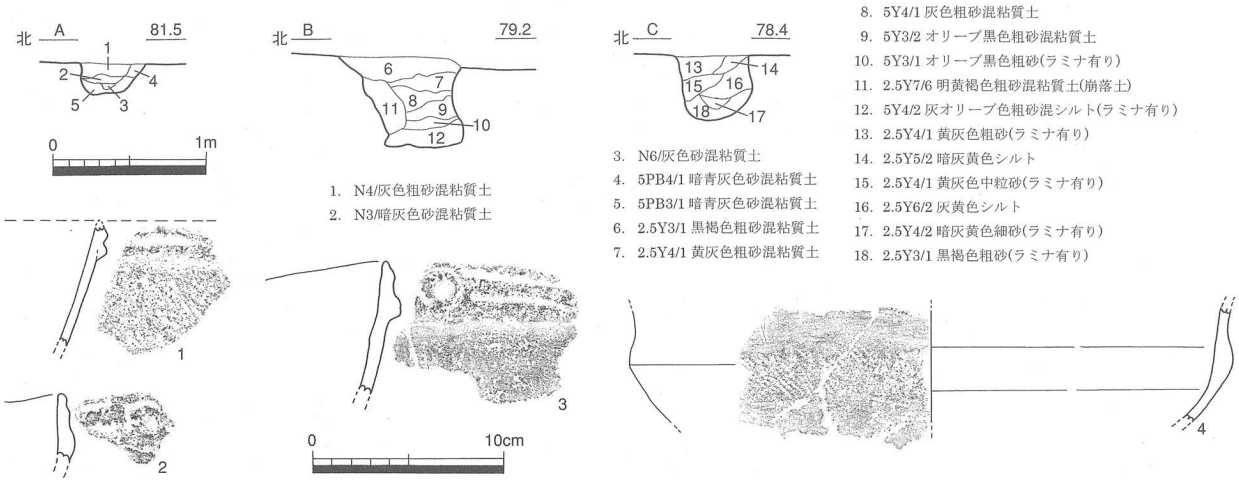
１．弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物

SD01（第７図）

SD01は、ⅡＡ区・ＩＢ区・ＩＡ区を横断するように検出した東西に伸びる溝状遺構で、検出長33.4m、幅1.4m、深さ0.6mを測り、断面形は逆台形～Ｕ字形を呈している。ⅡＡ区において南東方向からの溝状遺構と合流しているが、その上流部は中世の溝状遺構と不明遺構によって途切れている。

出土遺物は図示した縄文土器のほかに、弥生時代後期に属する微細な弥生土器片がある。１は口縁部外縁に太い沈線文を施した凸帯を持つ関東系（堀ノ内式）相当の浅鉢である。２・３は山形口縁の外縁に太い沈線文を施した永井Ⅰ・Ⅱ式相当の深鉢、４は彦崎Ｋ２式に相当する深鉢の胴部である。いずれも縄文後期前半に位置付けられるものである。

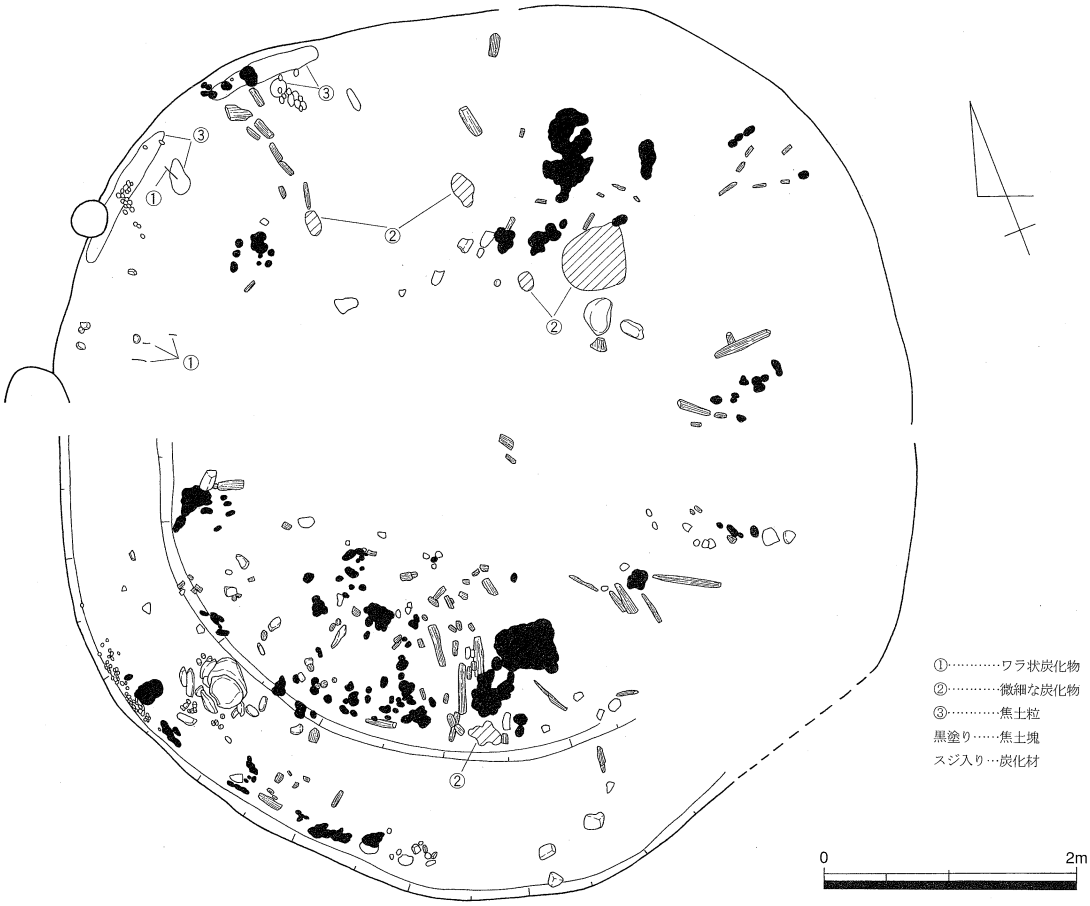
縄文土器と弥生土器が混在していること、縄文土器は磨滅・表面の剥落が著しい破片であり、上流からの流入の可能性が高いこと、溝状遺構の埋没後に弥生時代後期の竪穴住居跡SH02が築かれていることなどから、この溝状遺構は弥生時代に築かれ弥生時代後期以前に埋没したと位置付けることができる。



第７図　SD01断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

SH01（第８～11図）

SH01は、ＩＡ区で検出した竪穴住居跡である。平面形は円形を呈し、直径約6.6m、床面積約34.2㎡、検出面からの深さは約0.2～0.4mを測る。検出時にははっきりしなかったが、掘り進めていく

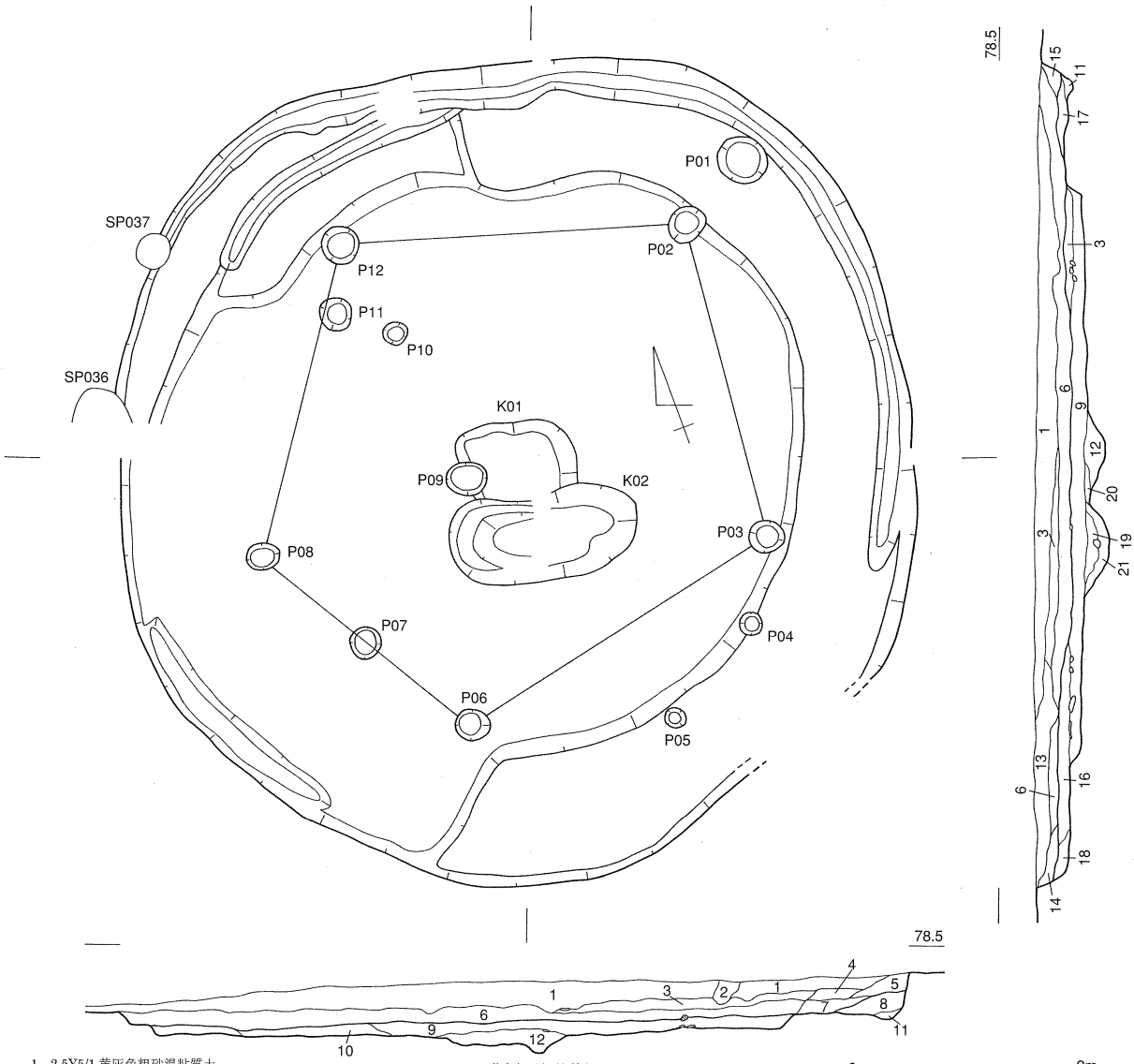


第８図　SH01炭化材・焼土等出土状況平面図(1/60)

につれて埋土中や床面上に炭化材や焦土塊を確認し、焼失住居であると判明した。焦土塊の中にはスサと思われる混和材の痕跡を残すものもあり、住居の壁土と思われる。焦土塊の分布状況を見ると、壁から２ｍ程度内側に転落したものもあり、屋根材の外面を覆っていた土屋根の一部が含まれている可能性もある。炭化材は住居の中心に向かって検出したものがいくつかあり、垂木に使用された木材と判断できる。また、埋土中には炭化材や焦土塊に混じって拳大～小児頭大の亜円礫や多数の土器片が出土している。

住居の東半分にベッド状遺構を検出した。ベッド状遺構は最大幅約1.0m、高さ0.2mを測り、土層断面の観察から地山を削り出していることがわかる。また、北西部分では一段低く、幅の小さなベッド状遺構を確認している。住居の外周に沿って壁溝が見られるが、全周はせずに部分的に途切れている。先述した小さなベッド状遺構付近では古い壁溝の一部を検出している。床面上で５基の主柱穴を検出した。主柱穴は直径約0.3m前後、深さ0.4～0.6mを測る。床面中央で炉跡である２基の中央土坑を検出した。１つは長径1.6m、短径0.7m、深さ0.2mを測る長楕円形のもの（K02）で、もう１つは長径1.1m、短径0.7m、深さ0.2mを測る不整楕円形のもの（K01）である。平面的には両者は組み合って「10型中央土坑」様を呈するが、遺構の先後関係はK01→K02であり、同時に機能はしていない。

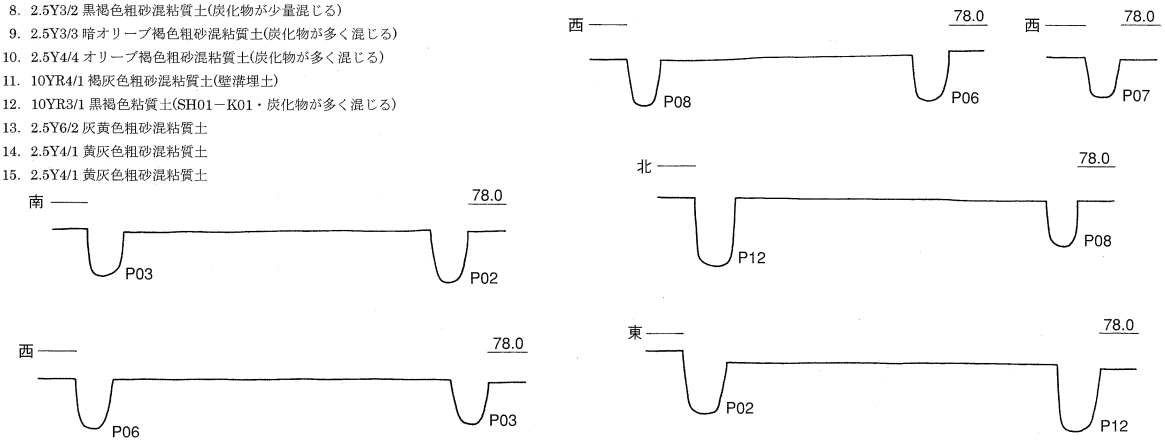
以上のベッド状遺構・壁溝・中央炉跡の状況を踏まえると、本竪穴住居跡ＳＨ01は最低１回の建て替えが行われているものと判断できる。また、遺物が床面直上にはほとんど見られないことから、



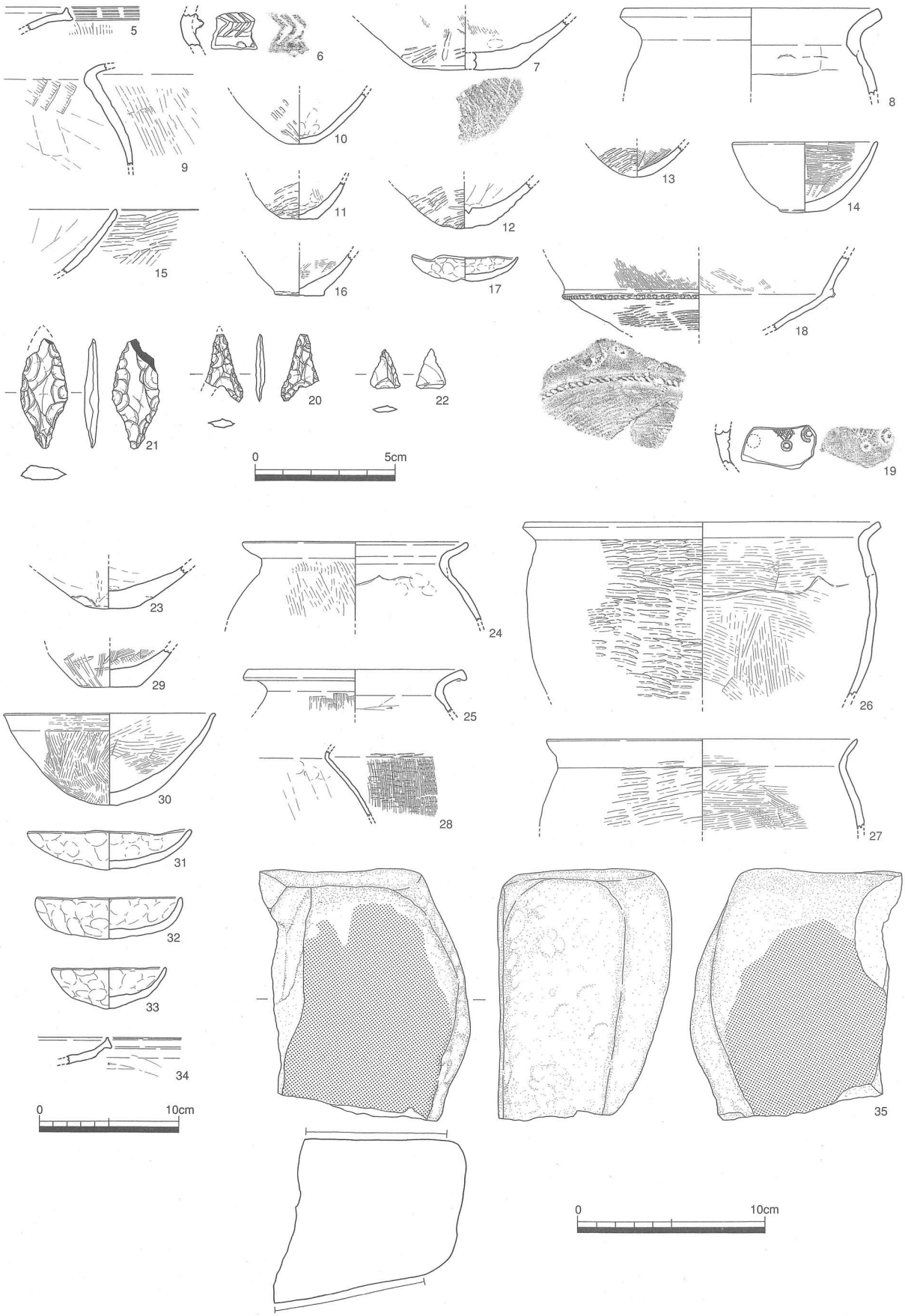
1. 2.5Y5/1 黄灰色粗砂混粘質土
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂混粘質土
3. 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混粘質土
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂混粘質土
5. 2.5Y4/1 黄灰色粗砂混粘質土(炭化物が少量混じる)
6. 2.5Y3/1 黒褐色粗砂混粘質土(炭化物が少量混じる)
7. 2.5Y6/2 灰黄色粗砂混粘質土(炭化物が少量混じる)
8. 2.5Y3/2 黒褐色粗砂混粘質土(炭化物が少量混じる)
9. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗砂混粘質土(炭化物が多く混じる)
10. 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂混粘質土(炭化物が多く混じる)
11. 10YR4/1 褐灰色粗砂混粘質土(壁溝埋土)
12. 10YR3/1 黒褐色粘質土(SH01－K01・炭化物が多く混じる)
13. 2.5Y6/2 灰黄色粗砂混粘質土
14. 2.5Y4/1 黄灰色粗砂混粘質土
15. 2.5Y4/1 黄灰色粗砂混粘質土
16. 2.5Y6/2 灰黄色粗砂混粘質土
17. 2.5Y3/2 黒褐色粗砂混粘質土
18. 2.5Y3/2 黒褐色粗砂混粘質土
19. 2.5Y2/1 黒色粘質土(SK01－K02・炭化物と焦土が多く混じる)
20. 2.5Y5/1 黄灰色砂混粘質土(部分的に焦土化)
21. 2.5Y2/1 黒色粘質土(炭化物の集積)

※ 1～7・13～15 は上層、8～10・16～18 は下層

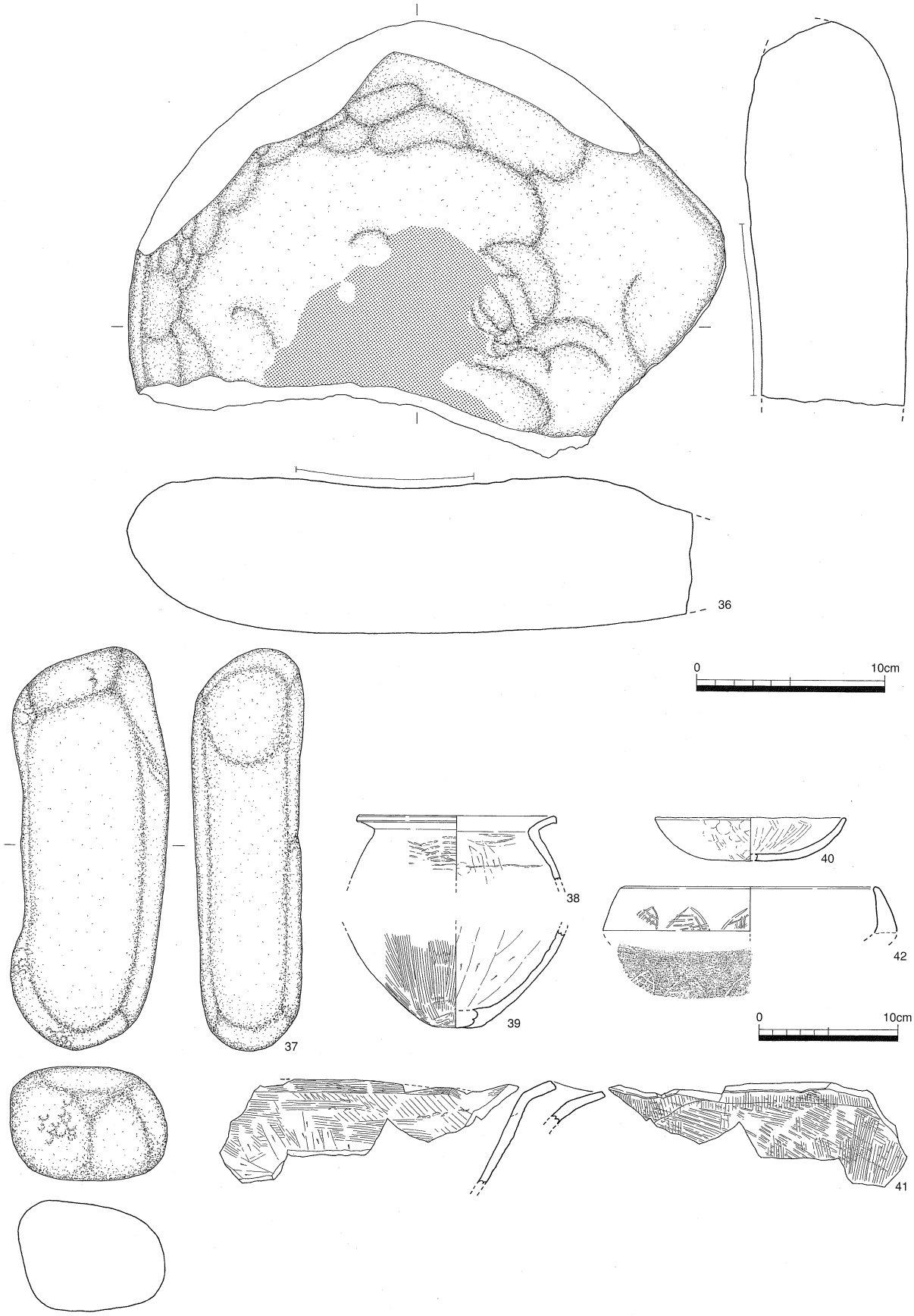
0 2m



第 9 図　SH01平・断面図(1/60)



第10図　SH01出土遺物①(1/2、1/3、1/4)



第11図　SH01出土遺物②(1/3、1/4)

不慮の失火等による焼失ではなく、住居を放棄する際に火を放った可能性が高い。

遺物は弥生土器と石器があるが、埋土中から出土しているものがほとんどであり、上下２層に分層して取り上げているためそれぞれ報告する。

５～23は埋土下層から出土した遺物である。５～７は壷である。６は頸部外面に矢羽状の刻目を施した突帯を貼り付けている。７は底部で平底を呈する。８～13は甕である。口縁部が緩やかに外反するものと強く屈曲するものがみられる。底部は小さな平底を有するものが多いが、13は丸底となっている。タタキ調整が顕著なものが多い。14～17は鉢である。平底を有し内弯気味に立ち上がる口縁部をもつものと、内外面に指頭圧痕が明瞭に残る浅い皿形のものが認められる。18は屈曲部に刻目を施した高杯の杯部、19は口縁端部を下方に拡張し、竹管文と円形浮文、鋸歯文を施した器台である。これらは形態から弥生時代後期後半～終末期の年代が想定できる。20～22はサヌカイト製の打製石鏃である。20は凹基式、21は凸基式の製品で、22は加工途中の未製品である。

23～41は埋土上層から出土した遺物である。23は小さな平底を有する壷の底部である。24～29は甕である。口縁部の屈曲が強いものと弱いものがみられ、タタキ調整を施したものが目立つ。29は甕の底部で平底を呈している。30～32は鉢である。丸底で内弯しながら立ち上がる口縁部をもつもの（30）と、内外面に明瞭な指頭圧痕を残した浅い皿形のものが認められる。34は傾きなどから高杯の口縁部と判断した小破片である。当該期の在地土器には見られない形態であり、他地域からの搬入品の可能性がある。平底の壷や甕が見られることや鉢の形態などから、これらは弥生時代後期後半～終末期の年代が想定できる。35・36は砂岩製の砥石である。ともに中央部に明瞭な磨滅痕が認められ、35は２面を砥面に使用している。37は片側に敲打痕の残る叩き石である。

中央炉跡や柱穴跡からも遺物は出土しているが、その量は僅少である。38～41は新しい方の中央炉跡（Ｋ02）から出土したものである。38はタタキ調整をもち口縁部が強く屈曲した甕、39は小さな平底をもつ甕の底部である。40は皿形を呈した鉢、41は片口部を有する大型品の鉢である。42は柱穴跡Ｐ07から出土した壷の口縁部で、外面にはヘラ描きの鋸歯文が認められる。これらは弥生時代後期後半に位置付けることができよう。

以上の検出状況や遺物の年代観から、SH01は弥生時代後期後半頃に住居として機能し、その廃絶時期は弥生時代終末期と考えることができる。

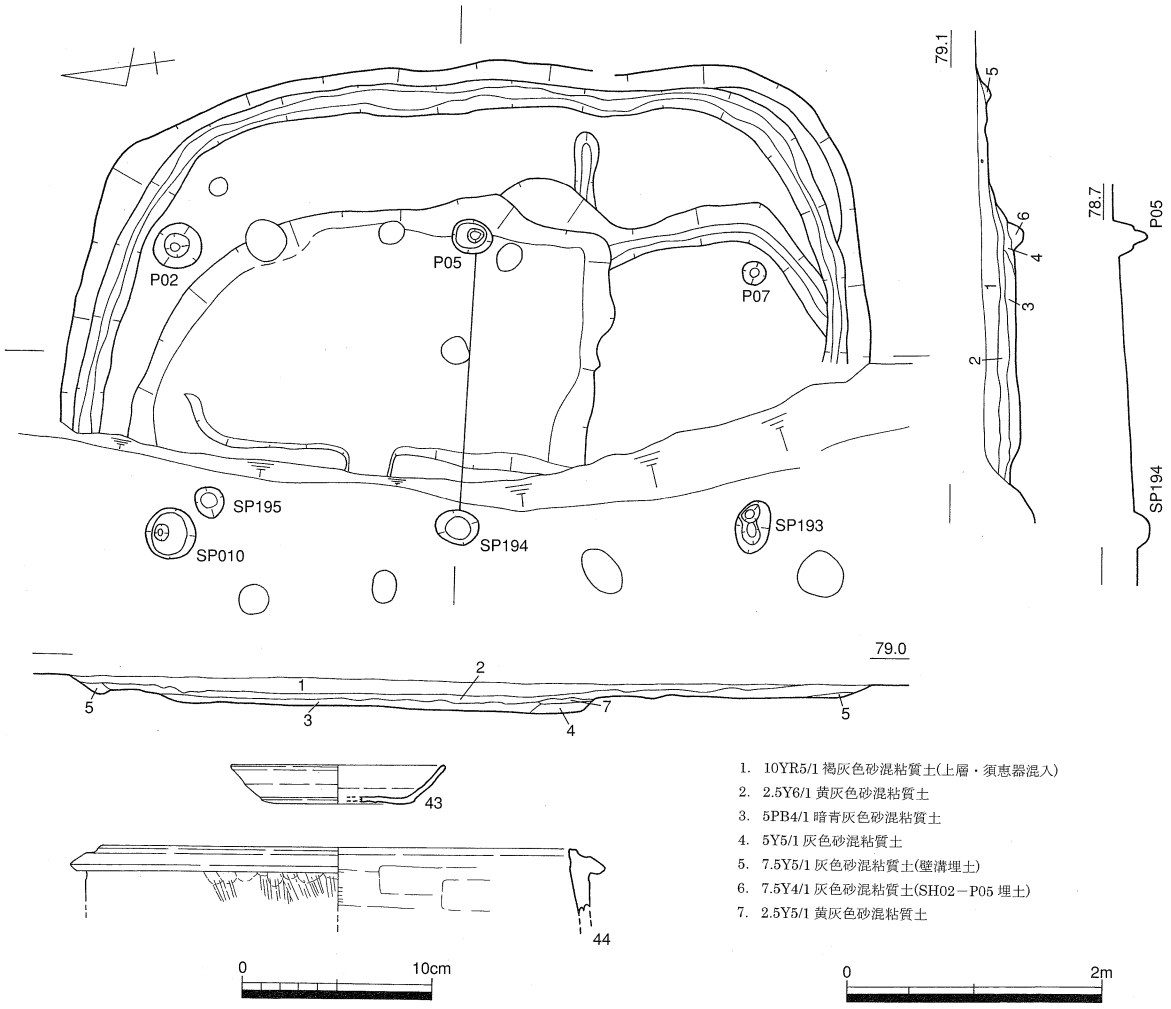
SH02（第12図）

SH02は、ＩＡ・ＩＢ区にまたがって検出した竪穴住居跡である。ＩＡ・Ｂ区の地境は後世の水田造成時の削平に起因するものであり、ＩＡ区部分は主柱穴のみが辛うじて確認できるまでに削平されていた。そのため全体の約1/2が検出できたものと思われる。先述した溝状遺構SD01の埋没後に築かれている。平面形は隅丸方形を呈し、検出長で3.8×6.2m、残存床面積約23.6㎡、検出面からの深さは約0.2～0.3mを測る。

住居の外周に沿って幅0.2m、深さ0.15mの壁溝を検出した。検出した部分を全周しており、途切れた部分は認められない。また、南辺ではこの壁溝に先行する壁溝が存在しているが、この壁溝は後述するベッド状遺構を掘り込んでいることからSH02に先行する竪穴住居跡とするには矛盾が生じる。したがってベッド状遺構を区切る目的の小さな溝状遺構と判断する。住居の北半部にはベッド状遺構が設けられている。南辺部分は幅1.8m、東辺部分は幅0.8m、北辺部分は0.3mと幅に差が見られるが、高さは約0.2mとほぼ揃っている。床面上で複数の柱穴跡を検出しているが、主柱穴の組み合わせははっきりしない。当初は６穴で１×２間（Ｐ02・05・07・SP193・SP194・SP

195）を想定したが、これでは南北辺の柱と壁の間隔が狭すぎて屋根（垂木）と干渉してしまうことになり、住居としては成り立たない。ここでは中央の２柱（Ｐ05とSP194）を主柱穴として復元する２本柱の竪穴住居跡として提示する。床面に炉跡を確認することはできなかった。ただ、削平による消失部分のすぐ脇に地山を削り出した小さな高まりが認められ、炉と関係する何らかの施設の痕跡である可能性がある。

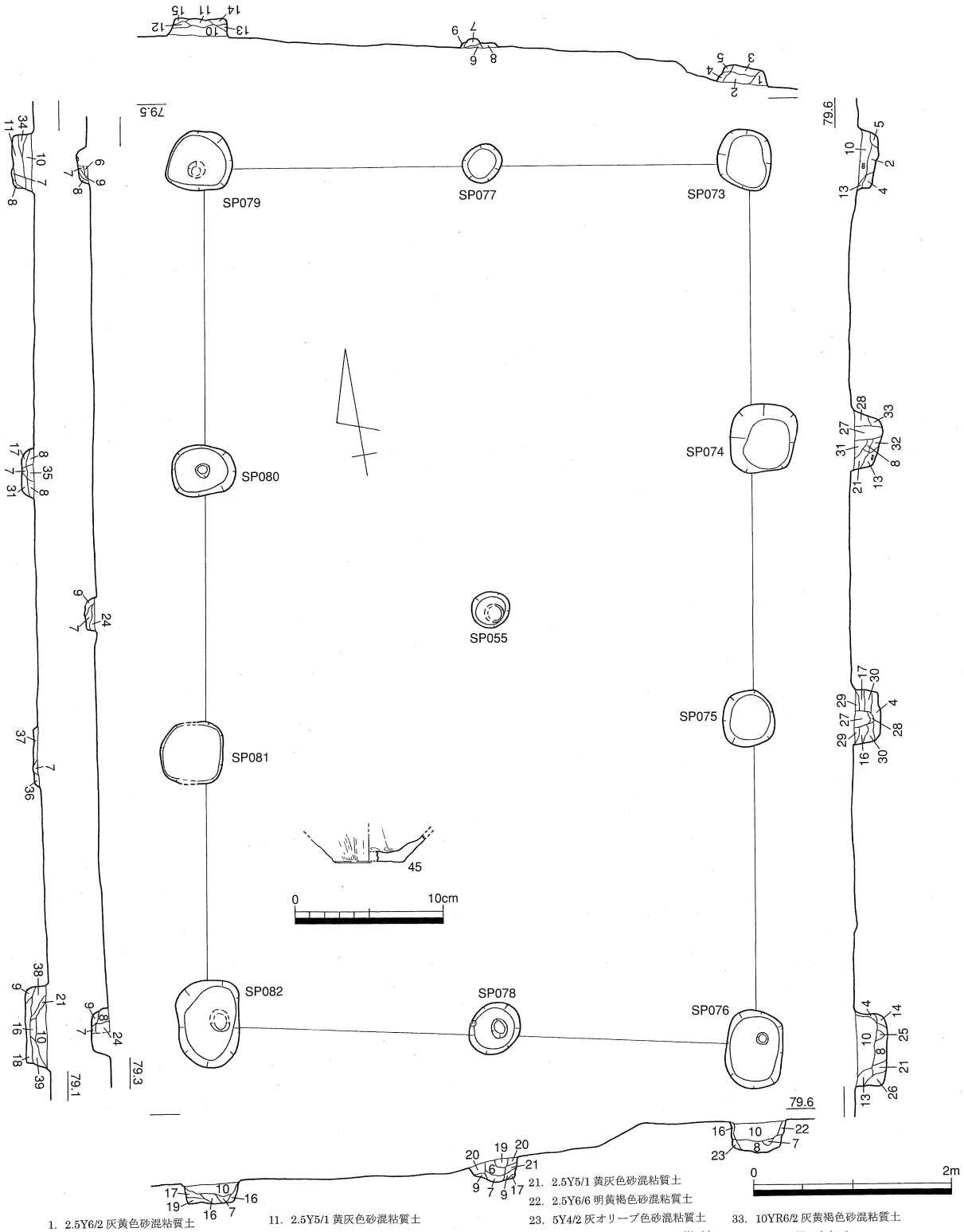
遺物は埋土中から弥生土器、中世土器が少量出土している。図化した２点はいずれも中世のもので、周辺に存在した柱穴等の遺物が混入したものである。43は土師器杯、44は土師器足釜で、13世紀代の年代が想定できる。図化できなかったが弥生土器甕等の細片が出土していることや、弥生時代後期以前に埋没した溝状遺構SD01の後に築かれていることから、この竪穴住居跡は弥生時代後期に属するものである。



第12図　SH02平・断面図(1/60)、出土遺物(1/4)

SB01（第13図）

SB01はＩＢ区で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。梁間２間（5.5m）×桁行３間（9.1m）で、床面積50.1㎡、主軸方向はＮ10°Ｅを測る。柱穴跡の掘り方は、平面形態が0.5m×0.6m程の隅丸方形を基調としているが、一定してはおらず、断面形態は逆台形を呈している。後世の削平のため柱穴跡の深さは検出部分で0.1～0.4mを測り、掘り込みの深度は一定していない。柱痕を確認



1. 2.5Y6/2 灰黄色砂混粘質土
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂混粘質土
3. 2.5Y5/4 暗灰黄色砂混粘質土
4. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂混粘質土
5. 2.5Y5/6 黄褐色砂混粘質土
6. 2.5Y4/1 黄灰色砂混粘質土(柱痕)
7. 2.5Y6/2 灰黄色砂混粘質土(柱痕)
8. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂混粘質土
9. 2.5Y5/3 黄褐色砂混粘質土
10. 2.5Y4/1 黄灰色砂混粘質土
11. 2.5Y5/1 黄灰色砂混粘質土
12. 2.5Y5/3 黄褐色砂混粘質土
13. 2.5Y5/4 黄褐色砂混粘質土
14. 2.5Y6/1 黄灰色砂混粘質土
15. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂混粘質土
16. 5Y5/1 灰色砂混粘質土
17. 5Y4/1 灰色砂混粘質土
18. 5Y5/2 灰オリーブ色砂混粘質土
19. 2.5Y6/1 黄灰色砂混粘質土(柱痕)
20. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂混粘質土(マンガン沈着)
21. 2.5Y5/1 黄灰色砂混粘質土
22. 2.5Y6/6 明黄褐色砂混粘質土
23. 5Y4/2 灰オリーブ色砂混粘質土
24. 2.5Y4/1 黄灰色砂混シルト(柱痕)
25. 2.5Y3/1 黒褐色粘土
26. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂混粘質土
27. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土(柱痕)
28. 5Y8/3 淡黄色粘質土(柱痕)
29. 2.5Y4/1 黄灰色砂混粘質土
30. 5Y5/3 灰オリーブ色砂混粘質土
31. 2.5Y4/1 黄灰色砂混粘質土
32. 10YR4/1 褐灰色砂混粘質土
33. 10YR6/2 灰黄褐色砂混粘質土
34. 5YR5/1 褐灰色粗砂
35. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土(柱痕)
36. 5Y5/2 灰オリーブ色砂混粘質土(裏込め土)
37. 5Y5/1 灰色砂混粘質土(裏込め土)
38. 2.5Y7/6 明黄褐色粘土ブロック
39. 5Y6/4 オリーブ黄色砂混粘質土

※ 2・3・10～12・34は抜き取り、4・5・8・9・13～18・20～23・26・29～33・38・39は地山塊多く含む裏込め土

第13図　SB01平・断面図(1/60)、出土遺物(1/4)

した柱穴跡がいくつか存在するが、そこから復元できる柱の直径は約0.2mである。柱の間隔を見ると梁間方向では約2.6mで一定しているのに対して、桁行方向では2.6～3.2mと不揃いである。各柱穴跡の土層断面の観察から、四隅の柱穴跡（SP073・076・082・079）では柱の抜き取りの痕跡が確認できた。この建物跡のほぼ中央部には柱穴跡１基（SP055）が存在しており、この位置は両梁間の中央に存在する棟持柱用柱穴跡２基（SP077・078）を結んだ線上に載ることから、この建物跡に伴うものと判断できる。建物中央で棟を支えた中央棟持柱とでも呼ぶべき機能、あるいは床構造に伴う役割をもった柱であろうか。

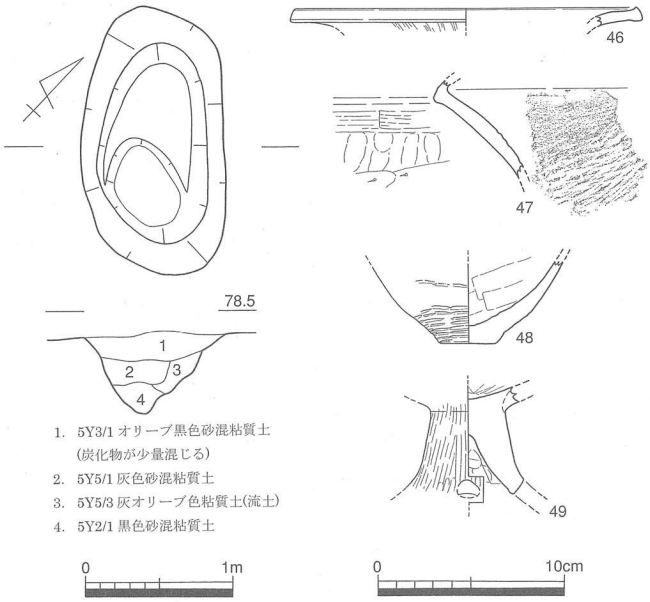
柱穴跡内の出土遺物は弥生土器細片があり、１点を図化した。45は隅柱跡SP077から出土した弥生土器甕の底部である。平底を有しており、弥生時代後期後半の年代が想定される。

２棟の竪穴住居跡との関係であるが、出土遺物の年代観からSH01と同時期に併存したものと見られる。SH02は弥生時代後期に機能したものと考えられるが、時期決定に使用することができる遺物がほとんどないことから遺物の年代観からは同時性を知ることはできない。両者の位置関係を見るとその間隔は1.6mであることから、同時併存とするには近接し過ぎており時間差をもった建物と捉えられる。

SK08（第14図）

SK08はＩＣ区で検出した土坑で、長径1.8m、短径1.0m、深さ0.5mの長楕円形の平面形態で、断面形状はＵ字形を呈する。自然埋没したことが土層観察から窺えるが、最上層には炭化物が少量混じっていた。

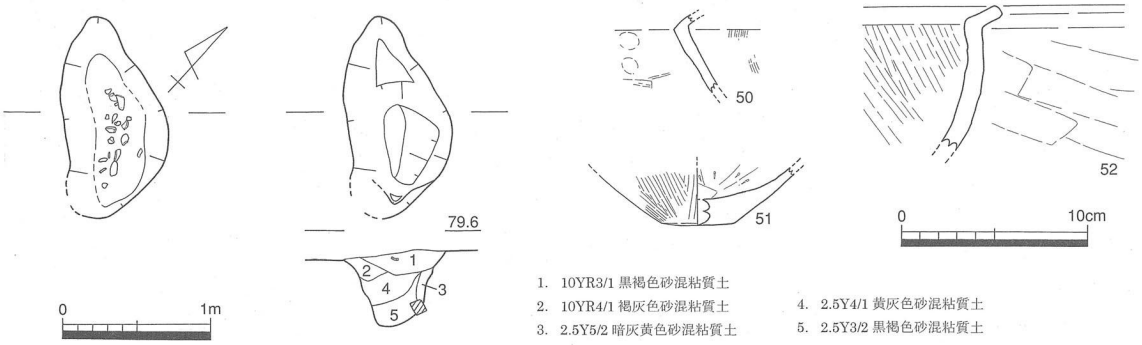
出土遺物は46～49の弥生土器がある。46は壷の口縁部、47・48はタタキ調整が明瞭な甕である。48は平底を呈している。49は途中で外方へ屈曲する高杯脚部の破片である。屈曲部付近に４つの穿孔を施している。土器の形態から弥生時代後期後半に比定できる。



第14図　SK08平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

SK14（第15図）

SK14はＩＣ区の東壁沿いで検出した土坑で、長径1.4m、短径0.7m、深さ0.5mの不整楕円形で、



第15図　SK14平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

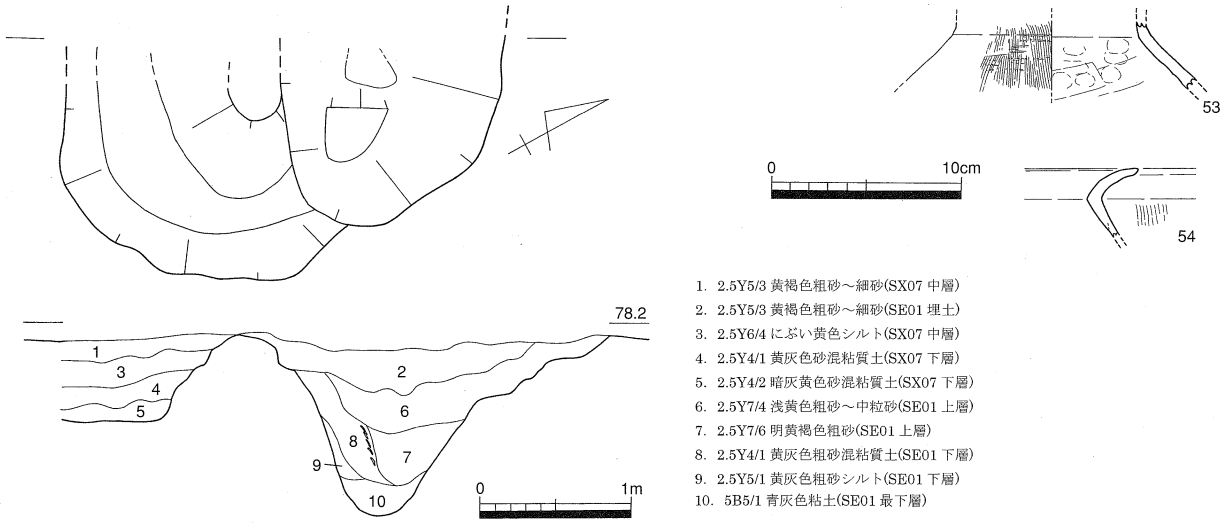
断面形状はＶ字形を呈する。底部付近には拳大の石が入っていた。

出土遺物は弥生土器がある。50は口縁部が強く屈曲した甕、51は小さな平底を呈する甕の底部である。52は口縁部を短く外方へ折り曲げた鉢である。土器の形態から弥生時代後期後半に比定できる。

SE01（第16図）

SE01はＩＤ区の北西隅付近で検出した素掘りの井戸跡で、東半分を検出した。平面形態は北半の深い掘り込みと南半の土坑状の掘り込みが結合した形を呈している。長径2.9m、短径1.3m以上、深さ0.6～1.1mを測る。北半の深い掘り込み部の土層断面観察からは２回程度の掘り直しが想定される。

出土遺物には53・54の弥生土器がある。53は外面にハケメ調整が著しい長頸壷である。54は口縁部が強く屈曲する甕である。土器の形態から弥生時代後期後半の年代が想定できる。

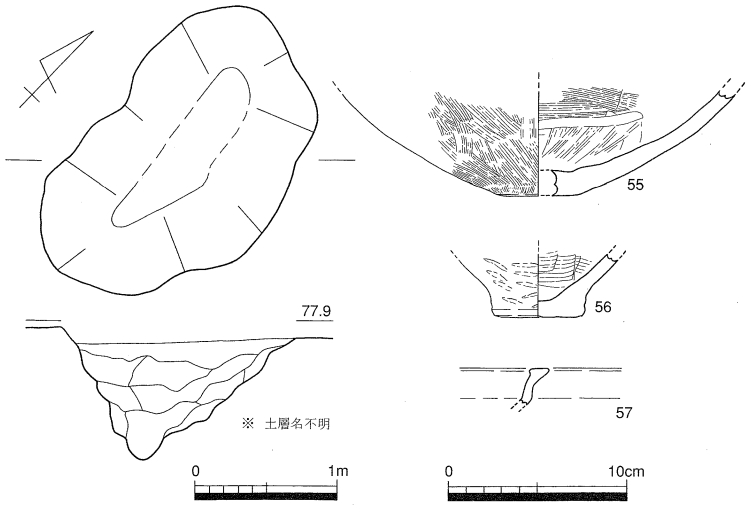


第16図　SE01平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

SE02（第17図）

SE02はＩＡ・Ｄ区に跨って検出した素掘りの井戸跡である。長径2.3m、短径1.3m、深さ0.8mの不整楕円形で、断面形状はＶ字形を呈している。土層断面観察からは１回程度の掘り直しが想定できる。

弥生土器が出土しており、55は小さな平底を呈する壷の底部である。56は突出気味の平底をした甕の底部である。57は口縁端部を肥厚させた高杯である。57はやや古い様相を見せるが、他の土器の形態から弥生時代後期後半代の年代が想定される。

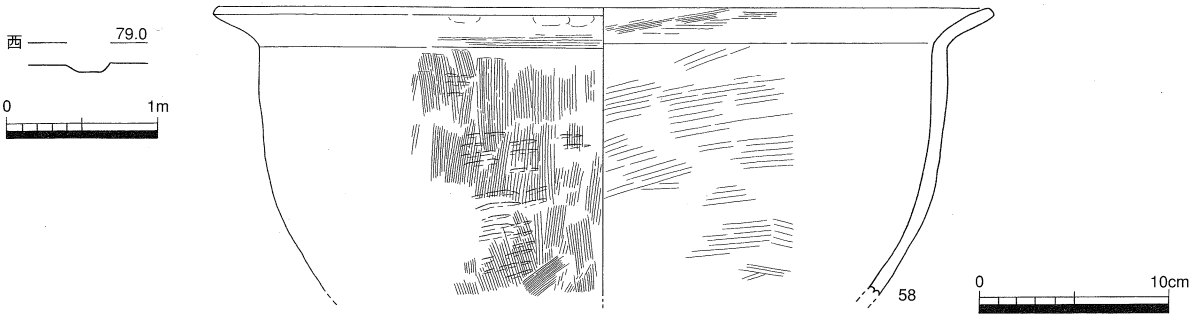


第17図　SE02平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

SD02（第18図）

SD02はＩＡ区の北寄りで確認した小規模な溝状遺構である。検出長2.3m、幅0.4m、深さ0.1mを測り、わずかに弧を描いていた。断面形状は浅い逆台形である。後世の削平によって溝状遺構の底部分の深いところだけが遺存したものと考えられる。全体の形状や性格等については判明しない。

埋土から58の弥生土器鉢が出土している。口縁部を外方へ折り曲げた大型品で、弥生時代後期に位置付けられる。



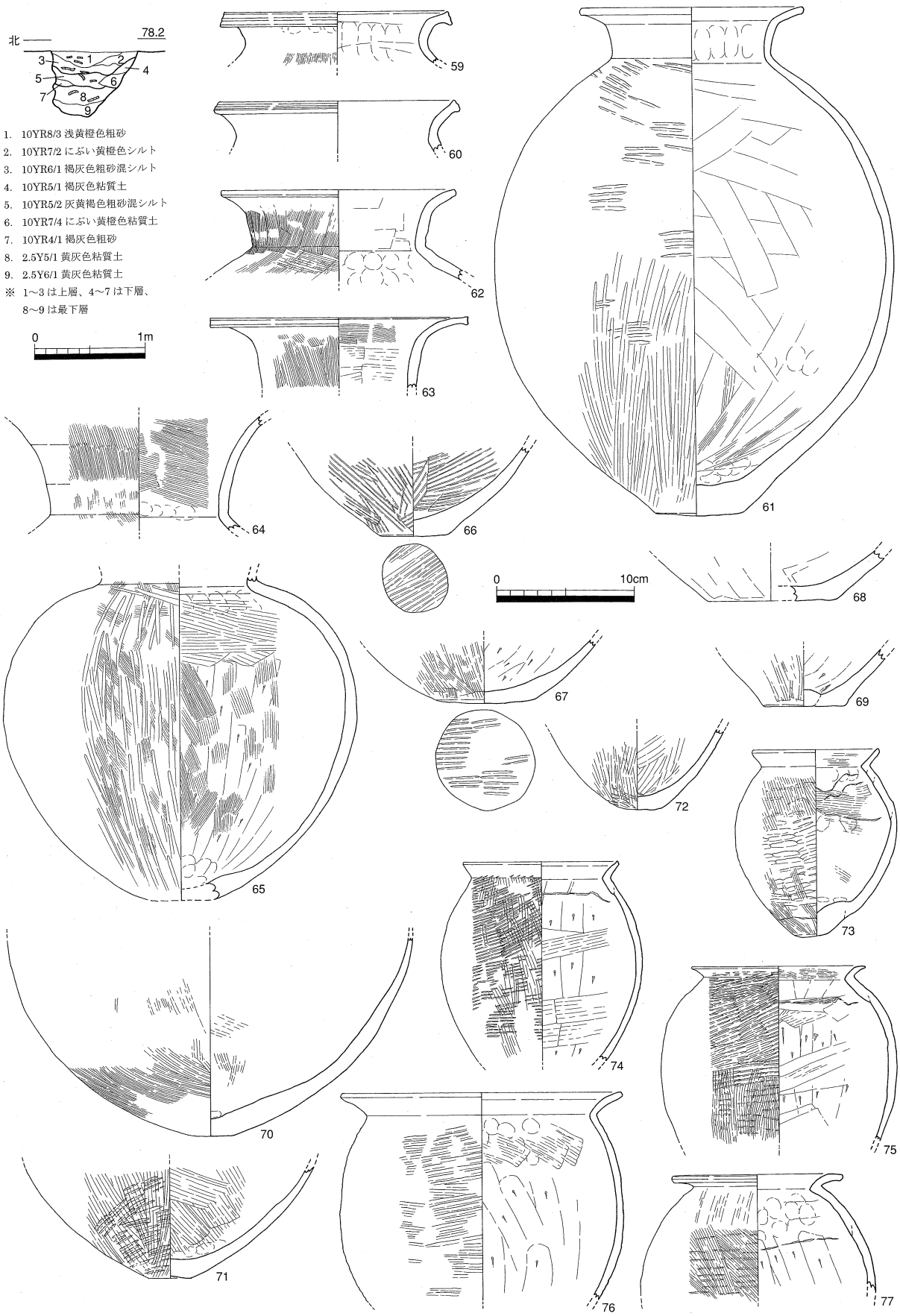
第18図　SD02平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

SD22（第19～22図）

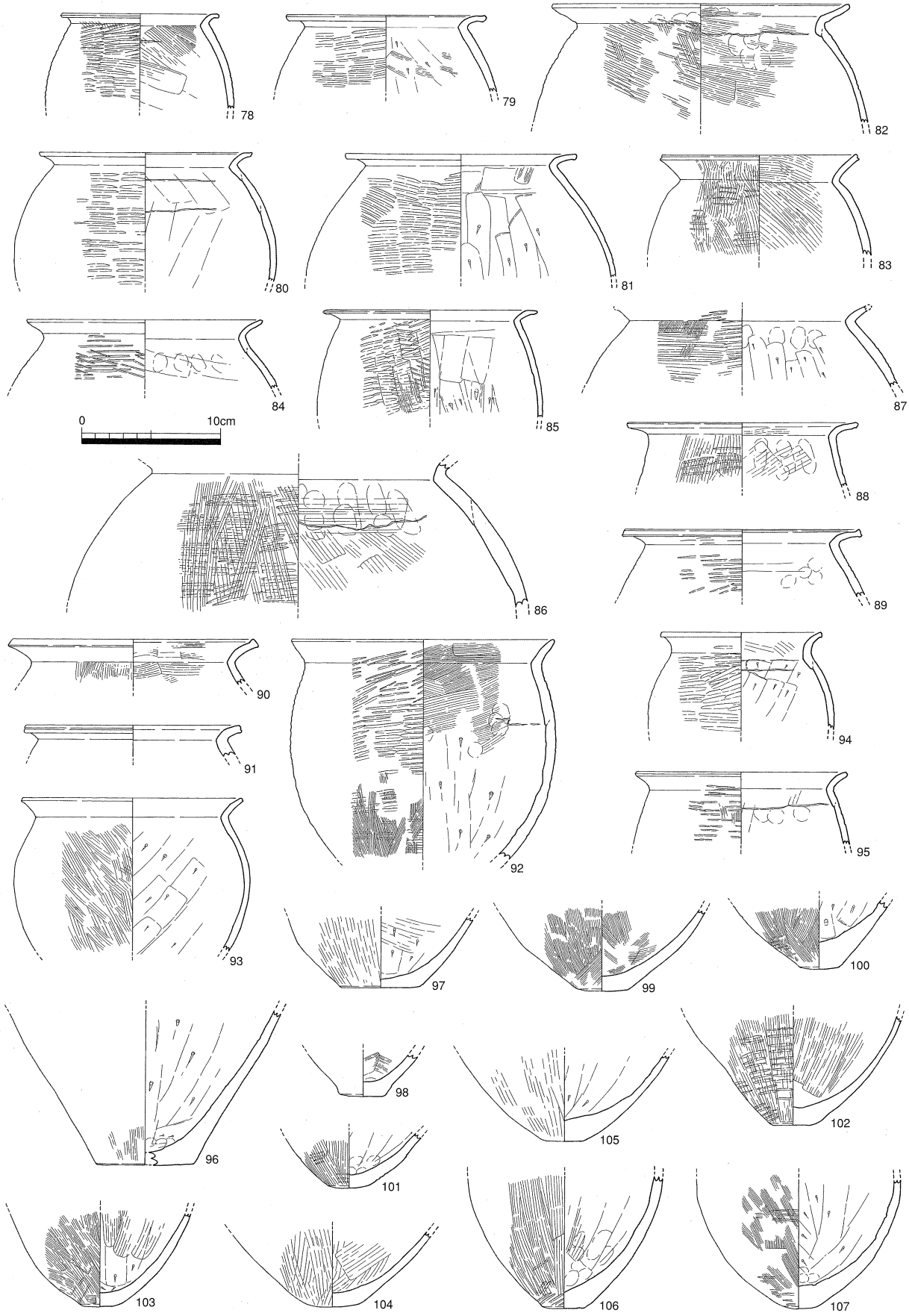
SD22はＩＤ区北壁付近で検出した溝状遺構で、検出長6.5m、幅1.0m、深さ0.6mを測る。ほぼ直線的に掘られているもので、断面形態は逆台形を呈している。この溝状遺構の北側は開折谷出口部に当っていることから、この小集落の北限を区切る目的を有していた可能性が高い。土層断面には粗砂やシルト層がラミナ状に認められることから、流水と滞水を繰り返しつつ埋没していったことがわかる。埋土中には比較的多量の土器破片が含まれており、調査時には上・下・最下層と３つに分けて遺物を採取した。土器量は最下層として取り上げたものが最も多く、次いで下層となり、上層はかなり少ない。溝状遺構の上流には集落が立地するスペースはなく、上流からの流れ込みの可能性はまずない。すなわち、この集落を構成した集団が使用した土器が廃棄されたと捉えることができ、竪穴住居跡SH01を放棄・放火するに当たって廃棄した土器も含まれているものと考えられる。

溝状遺構内から出土した弥生土器を採取した層位ごとに報告する。

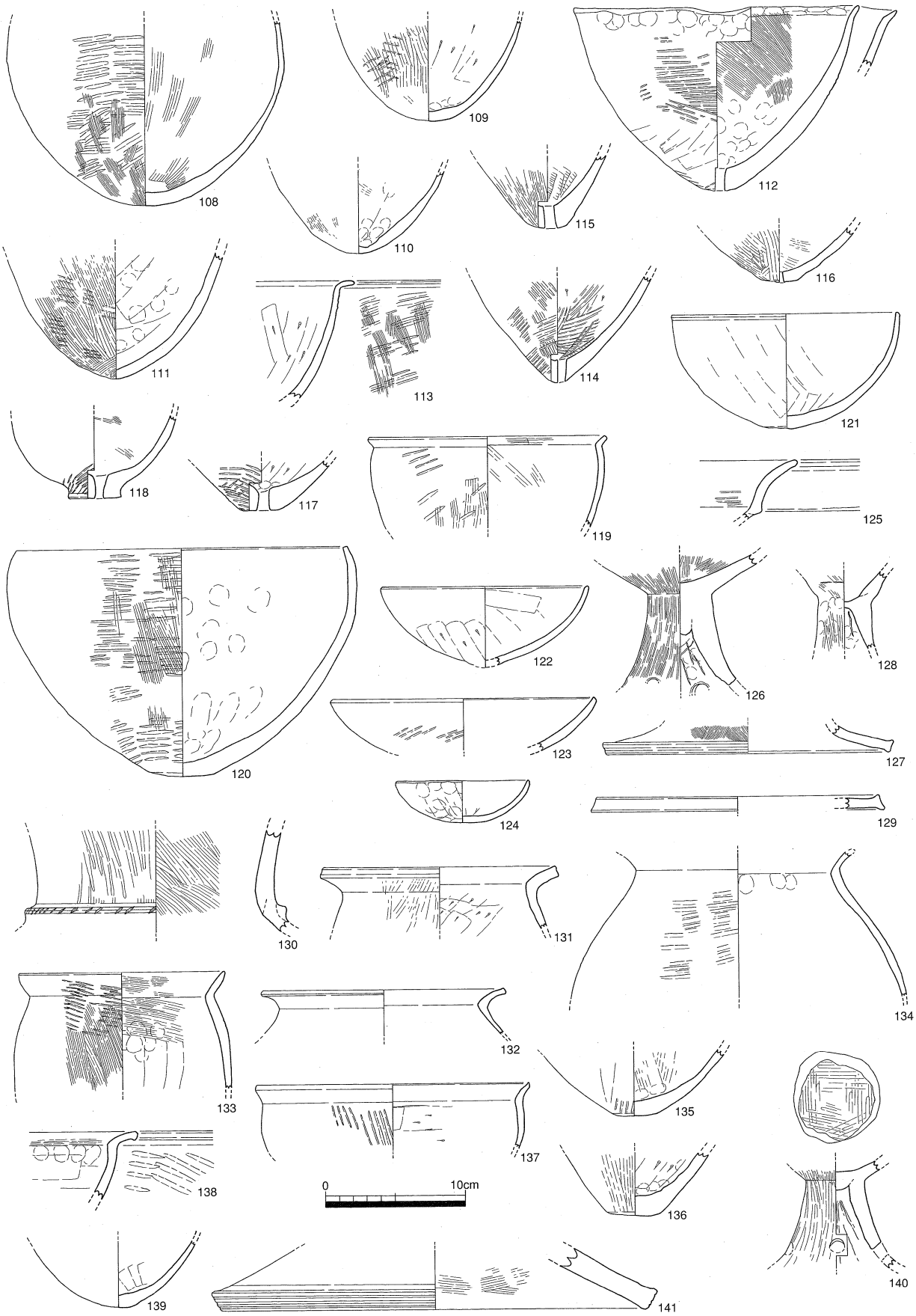
59～128は最下層として取り上げた弥生土器である。59～72は壷である。59・60は短い口縁部が大きく外反するものである。どちらも口縁端部を肥厚させて凹線・擬凹線を巡らせている。61・62は直線的に立ち上がり、途中から外方へ屈曲する短めの口縁部をもつものである。61はやや縦長の球形をした胴部に平底を有している。胴部下半はタタキ調整後にヘラミガキ調整で仕上げている。62は頸部から胴部にかけて細かなハケメ調整が顕著である。63・64はラッパ状の長い口縁部をもつものである。ともにハケメ調整が顕著で、63は口縁端部に擬凹線が認められる。65は平底を呈したやや扁球形の胴部である。63・64のような口縁部が付く形態と思われる。66～72は壷の底部である。いずれも平底を呈しているが、底面径の大きなもの（66～69）と小さなもの（70～72）が認められる。66・67は底面に叩き調整が顕著に残る。73～111は甕である。73～87は倒卵形で肩部が丸みをもった胴部に屈曲する口縁部が付くものである。口縁部の屈曲の度合いは強弱が見られる。外面はタタキ調整を内面はヘラケズリ調整を基本としており、外面はその後ハケメ調整で仕上げるものが多い。全体の形状が判明した73は小さな平底を有している。88～91は直線的な肩部に強く屈曲する口縁部が付くものである。外面はタタキ調整後にハケメ調整で仕上げるものとハケメ調整だけのも



第19図　SD22断面図(1/50)、出土遺物①(1/4)



第20図　SD22出土遺物②(1/4)

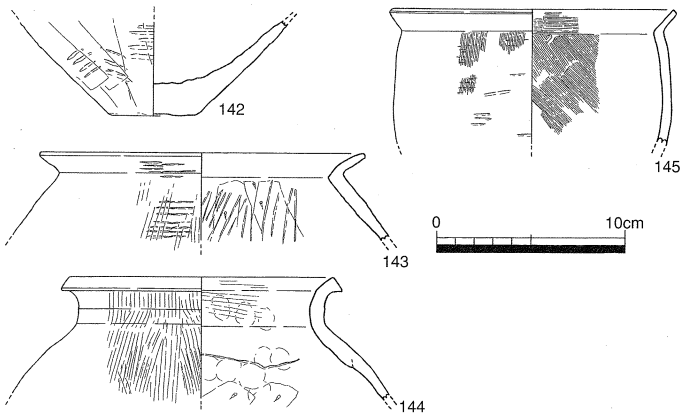


第21図　SD22出土遺物③(1/4)

のが見られる。90は口縁端部を上方に摘み上げている。92～95は胴部最大径と頸部径の差があまりないために「く」の字形を呈する口縁部をもつ。外面はタタキ調整後にハケメ調整で仕上げるものと、ハケメ調整だけのものが見られる。96～111は底部である。平底を呈しているものが多く見られるが、底部径の大きなもの（96・97）と小さなもの（98～107）の両者がある。98はやや突出気味の平底で、107の底部径はかなり小さいものである。また、丸底のもの（108～111）も認められ、111は若干尖り気味になっている。112～118は甑である。全体の形状の判明した112は深めの鉢形を呈しており、片口を有する。わずかに口縁部を外方に折り曲げており、この部分には指頭圧痕が顕著である。底部中央に穿孔を１つ有する。113は甑と判断したが鉢の可能性も残る。今回確認できた甑はすべて底部中央に１つの穿孔を有するものであった。底部の形態は尖り気味のもの（114）や小さな平底を呈するもの（116・117）、突出した平底のもの（118）などバリエーションがある。119～124は鉢である。口縁端部を短く外方へ折り曲げるもの（119）、深めのボウル状を呈するもの（120・121）、浅めの椀形をしたもの（122～123）、丸底で浅いボウル状のもの（124）などが認められる。120は大型品である。底部の判明したものは小さな平底を有するものが多いが、124は指頭圧痕が顕著な丸底をしている。125～127は高杯である。127は屈曲してから大きく外反する口縁部をもつ杯部である。126は伏せたラッパ状に広がる脚部で、中位に２個１対の穿孔を３箇所に施している。127も同様の形態をする脚部で、端部を肥厚させて擬凹線１条を巡らせている。脚部は細かいハケメ調整が顕著である。128は高杯の接合部とするには杯部の窪みが深過ぎるため、支脚と判断した。

129～141は下層として取り上げた弥生土器である。129・130は壷である。129は口縁端部を上下にわずかに拡張させている。130は直立気味に外反する頸部で、胴部との境には貼付突帯を１条巡らせている。131～137は甕である。直線的な肩部に強く屈曲する口縁部が付くもの（131・132）、胴部最大径と頸部径の差があまりないために「く」の字形を呈する口縁部をもつもの（133）、倒卵形で肩部が丸みをもった胴部に屈曲する口縁部が付くもの（134）がある。外面はタタキ調整後にハケメ調整を施したものとハケメ調整だけのものが見られる。135・136は甕の底部である。どちらも平底を呈しており、外面はハケメ調整である。137～139は鉢である。内弯気味の体部から外反する口縁部をもつもので、138は外方へ強く折り曲げている。139は突出気味の小さな平底を呈する鉢の底部である。140は高杯である。伏せたラッパ状に開く脚部で、４方向に穿孔がある。脚部と杯部の接合は円盤充填法を用いており、杯部内面は４分割のヘラミガキ調整で仕上げている。141は器壁の厚い大型品で、器台の脚部と見られる。脚端部はわずかに肥厚気味で擬凹線３条が巡る。

142～145は層位の判明しない弥生土器である。142は平底を呈する壷の底部である。143～145は甕である。143は直線的な肩部に強く屈曲する口縁部が付くもの、144は丸味を帯びた肩部に短く外反する口縁部が付くものである。144は口縁端部を下方へ摘み出しており、壷の可能性がある。145は胴部最大径と頸部径がほぼ同じで「く」の字形を呈する口縁部をもつ。内面の細かいハケメ調整が顕著である。



第22図　SD22出土遺物④(1/4)

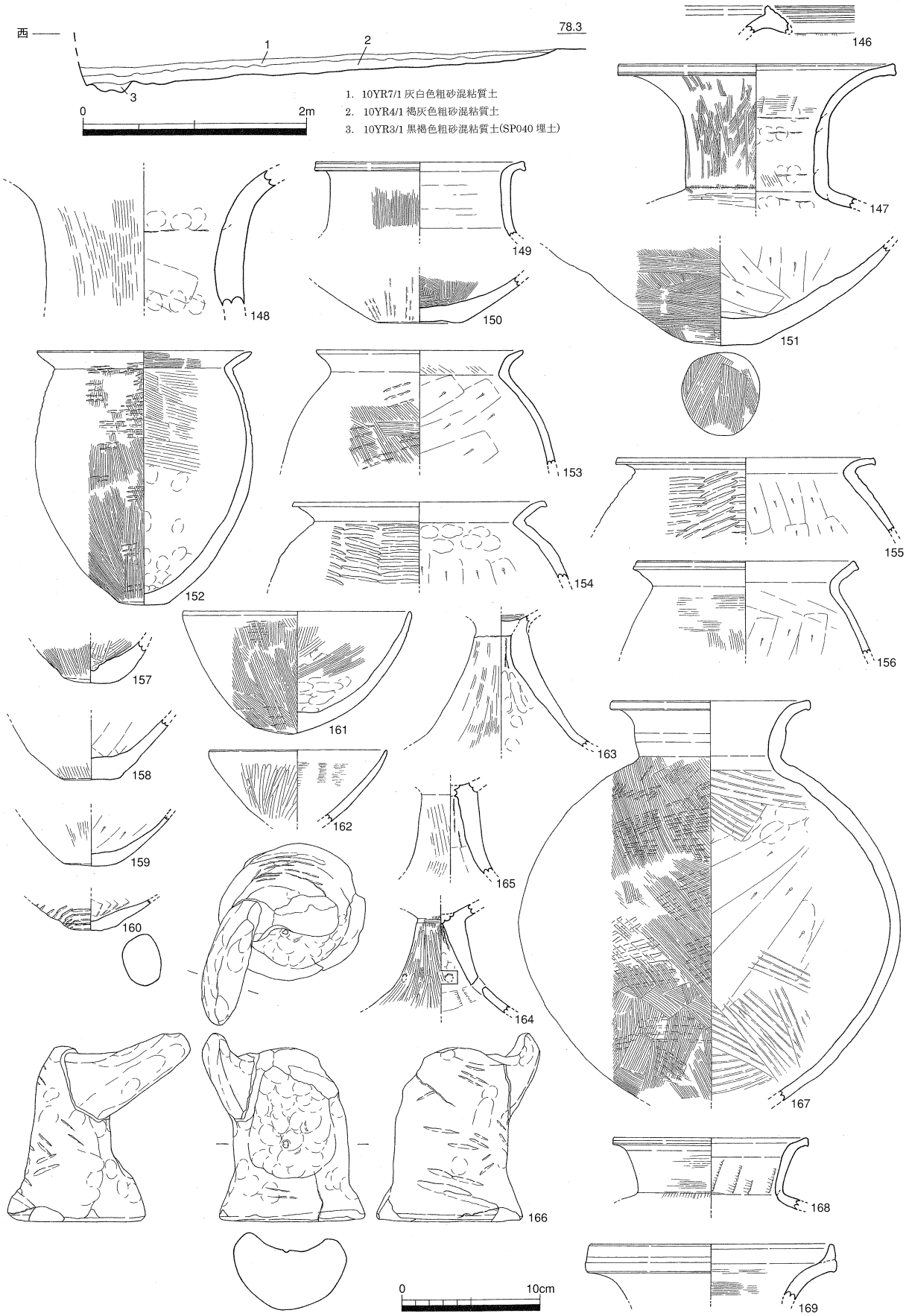
以上、SD22出土土器を概観してきたが、層位ごとに年代をまとめると、最下層出土土器の大半はその形態から概ね弥生時代後期後半に位置付けられるが、甕底部に丸底のもの（108～111）が含まれることや、鉢に丸底で浅いボウル状のもの（124）が見られることから、弥生時代終末期のものも混在している。一方、下層出土土器には丸底の底部が見当たらないことや、高杯（140）の分割へラミガキ調整や器台（141）脚端部の擬凹線などの存在から弥生時代後期後半に位置付けられる。土器の年代観と土層の堆積状況は一致しておらず、SD22の土層層位は時期差を反映していないと判断できる。土器の年代観に従えば、SD22は弥生時代後期後半に機能し、弥生時代終末期に埋没してその役割を終えたといえる。

SX07（第23・24図）

SX07はＩＡ・Ｄ区西壁沿いで検出した不整形な落ち込みである。検出長32.3m、幅5.2m、深さ0.6～0.8mを測り、その輪郭は概ね等高線に沿うようである。調査時は谷地形と称していたが、緩斜面地に存在した微凹地部分と想定される。埋土は黄色系の砂質土・粘質土・シルトが堆積しており、長い時間をかけながら徐々に埋没していったことがわかる。したがって、弥生時代の遺構はSX07の埋積中に掘り込まれ、中世の遺構はSX07の埋没後に掘り込まれるという状況になっている。

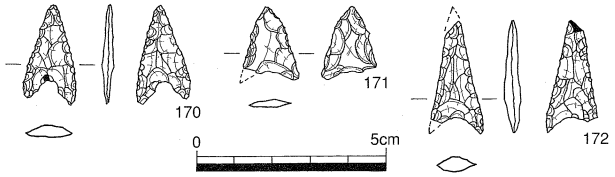
埋土は上下２層に大別できる。上層からは弥生土器・石器・須恵器・土師器などが、下層からは弥生土器・土師器が出土しているが、総じて上層からの遺物は僅少である。

146～166は弥生土器である。146～151は壷である。146は器台の可能性もあるが、大型品の壷の口縁部と判断した。端部を上下に拡張して擬凹線４条を巡らせている。弥生時代後期中頃に位置付けられる。147・148は直立する頸部から大きく外反してラッパ状に開く口縁部をもつ壷である。147は口縁端部をわずかに肥厚させ、擬凹線１条を巡らせている。外面はハケメ調整の後に部分的にへラミガキ調整を施している。149は直立気味の頸部から短い口縁部が強く外反するものである。端部には凹線１条を巡らせている。150・151は底部で平底を呈する。151は大型品の底部である。152～160は甕である。いずれも球形の胴部から口縁部が強く屈曲する形態であるが、屈曲の度合いや肩部の張りには若干の差異が見られる。外面にタタキ調整を施したものが多く、その後ハケメ調整をする個体も多い。全体の形状が判明した152は砲弾型の胴部に強く屈曲する口縁部が付いたもので、底部は平底を呈している。157～160はいずれも平底を呈した甕の底部である。161・162は内弯しながら立ち上がるボウル状の鉢である。161は平底を呈しており、外面のハケメ調整が顕著である。162は外面をへラミガキ調整で仕上げている。163～165は高杯の脚部である。伏せたラッパ状の形態をしており、164は中位に５つの穿孔を施している。163は円盤充填法を採用している。166は支脚である。２本の指部が前方に延びる形状を呈しており、あたかも頭の外れた土製人形のように見えるものである。胴体に当たる部分は腹側が大きく窪んでおり、へそに当たる位置には上から棒状工具の刺突による小穴がみられるが、貫通はしていない。脇腹から背中に当たる部分には整形時についたタタキ調整の痕跡が残る。両手に当たる２本の指部は粘土を貼り付けて形づくるもので、片側は欠損している。指部を貼り付けた後、上から両肩に当たる部分に粘土帯を貼り付けていることがわかる。胴体の裾に当たる部分は広げてあり底面は平らにしている。中実であるためかなりの重量があり、裾広がりの形状と合わせてどっしりとした安定感がある。現在のところ香川県下では類例はなく、他地域からの搬入品である可能性が高い。167～169は土師器壷である。167・168は外傾する頸部から短い口縁部が大きく外反するものである。167は球形の胴部で、胴部最大径はほぼ中位にある。底部を欠損しているもののおそらく丸底と思われる。外面の細かいハケメ調整が顕著



第23図　SX07断面図(1/50)、出土遺物①(1/4)

である。168も同様の器形である。169は大きく外反する口縁部の端部上位に粘土紐を断面三角形の突帯状に貼り付けたもので、二重口縁が形骸化したような形態をしている。外面には接合部を利用した凹線１条が巡る。170～172はサヌカイト製の打製石鏃である。いずれも凹基式である。



第24図　SX22出土遺物②(1/2)

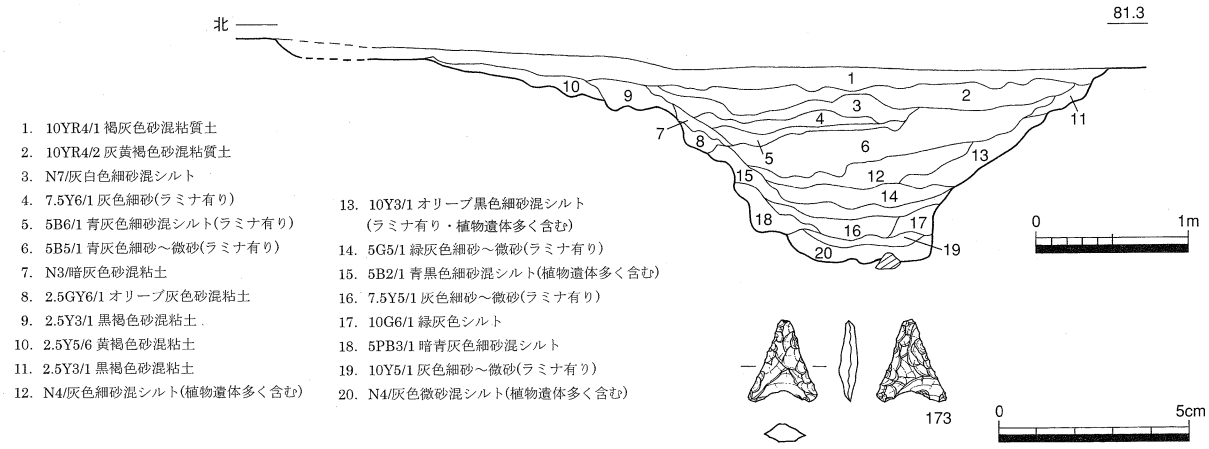
図化した遺物の年代は、その形態から弥生時代後期後半が中心であり、わずかに古墳時代初頭の遺物が含まれているようである。このほか、図化できなかったが、土師器足釜の脚部片や格子タタキを施した須恵器甕の破片などが出土している。遺物の年代観からも、弥生時代後期から埋没を開始し、最終的な埋没時期は中世の13世紀頃であると言える。

SR01（第25図）

SR01はⅡＢ区北壁付近で検出した自然河川である。検出長8.7m、幅3.4m、深さ1.3mを測る。調査区東側の丘陵谷部から流下する小河川と考えられる。土層断面の観察からは細砂層とシルト層の互層が認められることや、シルト層には多数の植物遺体が含まれていることから、恒常的な流水はなく大雨等の際に流水があり、自然埋没していったことが窺える。SR01の北半は後述するＳＸ09と重なっている。土層断面の観察によるとSX09の埋没途中にSR01が機能・埋没し、SX09の上層（中世の遺物を含む）がSR01の上面を覆っていることがわかる。

出土遺物は最下層でサヌカイト片と自然木、埋土中位で石鏃１点があるに過ぎない。173は凹基式の打製石鏃である。素材にはサヌカイトを使用している。SR01の最下層、底面に接して検出した自然木は検出長2.4m、直径0.4mを測るもので、加工痕等は認められないことから上流からの倒木が落ち込んだものと判断できる。

年代については判断材料がないため、中世以前に埋没した自然河川ということしか判明しない。



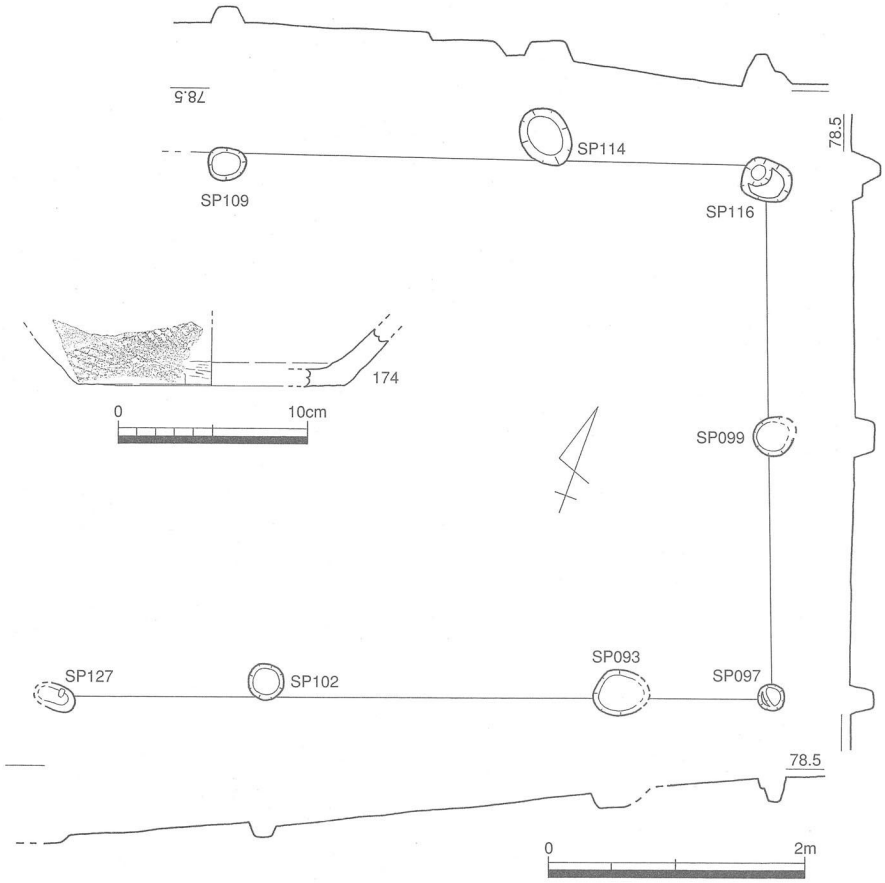
第25図　SR01断面図(1/50)、出土遺物(1/2)

2．中世の遺構・遺物

SB02（第26図）

SB02は、ＩＣ区南西隅付近で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。西半部は調査区外に続いているため、全体の半分程度を検出したと思われる。梁間２間（4.3m）×桁行３間以上（5.7m以上）で、床面積は24.5㎡以上、主軸方向はＮ69°Ｅを測る。柱間は梁間方向では約2.1mと一定しているが、桁行方向は北辺と南辺で組み合う柱穴跡の数が異なっているために1.2～2.7mと不揃いとなっている。柱穴跡の掘り方は基本的に円形で直径0.3～0.4mを測り、柱の直径は0.2m程度であったと推定される。

出土遺物は時期比定が困難な土師器細片以外に、SP109から須恵器甕の底部片（174）がある。174は底部外面に格子タタキ調整を施しており、13世紀代に位置付けることができる。

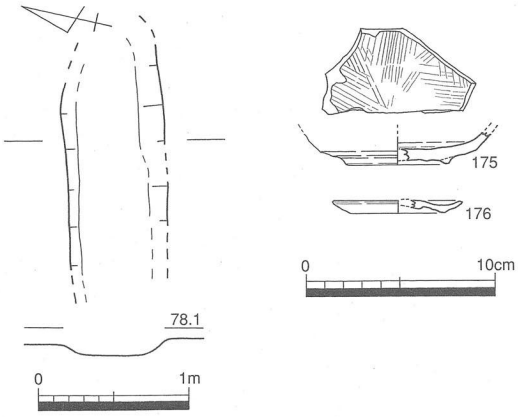


第26図　SB02平・断面図(1/60)、出土遺物(1/4)

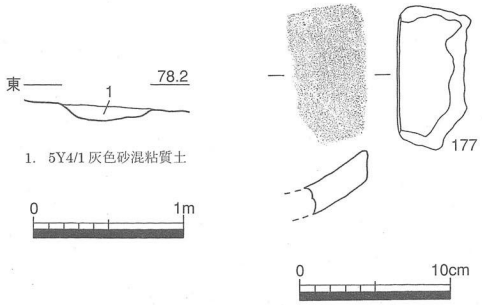
SK11（第27図）

SK11は、ＩＣ区の西壁沿いで検出した土坑で、西半部は調査区外へ続いており、東端部は溝状遺構で壊されているため全体の規模は判明しない。検出長1.25m、幅0.7m、深さ0.1mを測り、平面形は隅丸長方形を呈しているものと想定される。断面形状は浅い逆台形を呈している。

出土遺物は175の須恵器椀と176の土師器小皿がある。175は底部に小さめの貼付け高台をもつもので、内面は回転ナデ調整後にハケメ調整で仕上げている。13世紀代に位置付けることができる。176はわずかに口縁部が立ち上がる形態の小皿で、底部が大きく歪んでいる。13世紀代の年代が想定できる。



第27図　SK11平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)



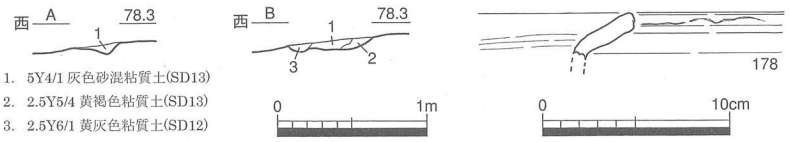
第28図　SD10断面図(1/50)、出土遺物(1/5)

SD10（第28図）

SD10はＩＣ区の西壁付近で検出した小規模な溝状遺構である。検出長2.3m、幅0.4m、深さ0.1mを測り、N23°Wの方向を有している。断面の形状は浅い皿形を呈する。先述した掘立柱建物跡SB02と重なっており、建物とは時期差が想定されるが、先後関係を示す根拠はない。

出土遺物は177の平瓦片が１点出土しているのみである。内面に布目圧痕を残したもので軟質（瓦質）焼成である。中世に属するものである。

SD13（第29図）



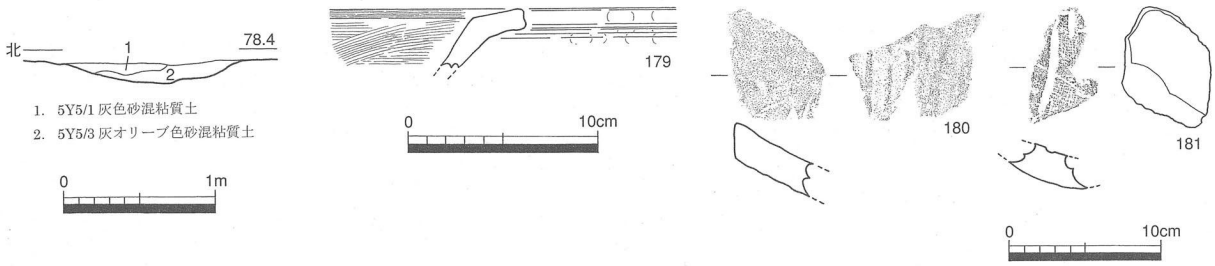
第29図　SD13断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

SD13はＩＣ区のSD10の東側で検出した小規模な溝状遺構である。検出長5.1m、幅0.4m、深さ0.1mを測り、わずかに湾曲しているが概ねN18°Wの方向を示している。断面の形状は逆三角形から浅い皿形を呈する。SD10と同様に掘立柱建物跡SB02と重なるため建物とは時期差が想定できるが、先後関係を示す根拠はない。

埋土から土師器細片と平瓦細片が出土している。178は土師器土鍋である。口縁部を外方へ折り曲げたもので、中世に位置付けられる。

SD17（第30図）

SD17はＩＣ区の西壁沿いで検出した溝状遺構である。西半部は調査区外へ続いており、全容は判明していない。検出長4.5m以上、幅1.2m、深さ0.1mを測り、N78°Eの方向を示している。

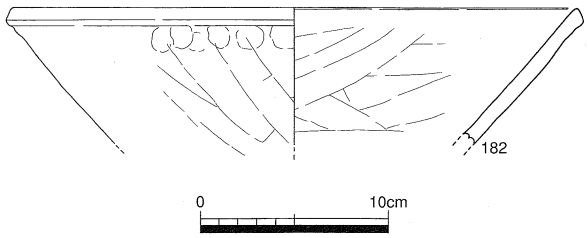


第30図　SD17断面図(1/50)、出土遺物(1/4、1/5)

断面の形状は浅い皿形を呈している。出土遺物はごくわずかである。179は土師器土鍋、180・181は軟質（瓦質）焼成の平瓦である。土鍋の形態から13世紀代に位置付けることができる。

SX01（第31図）

SX01はＩＣ区南端付近で検出した浅い不定形な落ち込みである。検出長2.6m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。一部はSX08と重なっているようであるが先後関係についてははっきりしない。遺物は182の土師器こね鉢が１点のみ出土した。形態から14世紀代に位置付けられる。



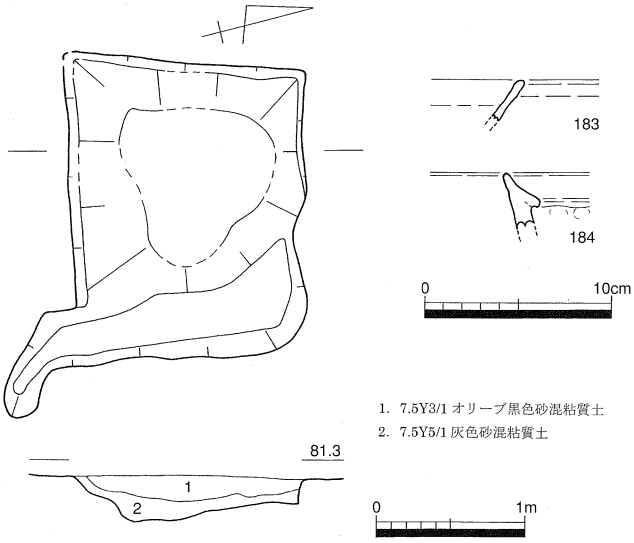
第31図　SX01出土遺物（1/4）

SX04（第32図）

SX04はⅡＡ区のほぼ中央で検出した土坑状を呈する落ち込みで、中世に比定される溝状遺構SD23の埋没後に掘り込まれている。平面形態は一辺1.6mの長方形の東辺に短い溝状遺構が付いたような形をしている。深さは0.2～0.3mを測る。

埋土中から183・184の２点が出土している。183は土師器杯である。口縁端部に炭素が吸着している。12世紀の年代が想定される。184は土師器足釜である。鍔部の退化が進んでおり、14世紀代に位置付けられる。

184の年代観から14世紀に属する遺構と判断するが、その性格は判明しない。

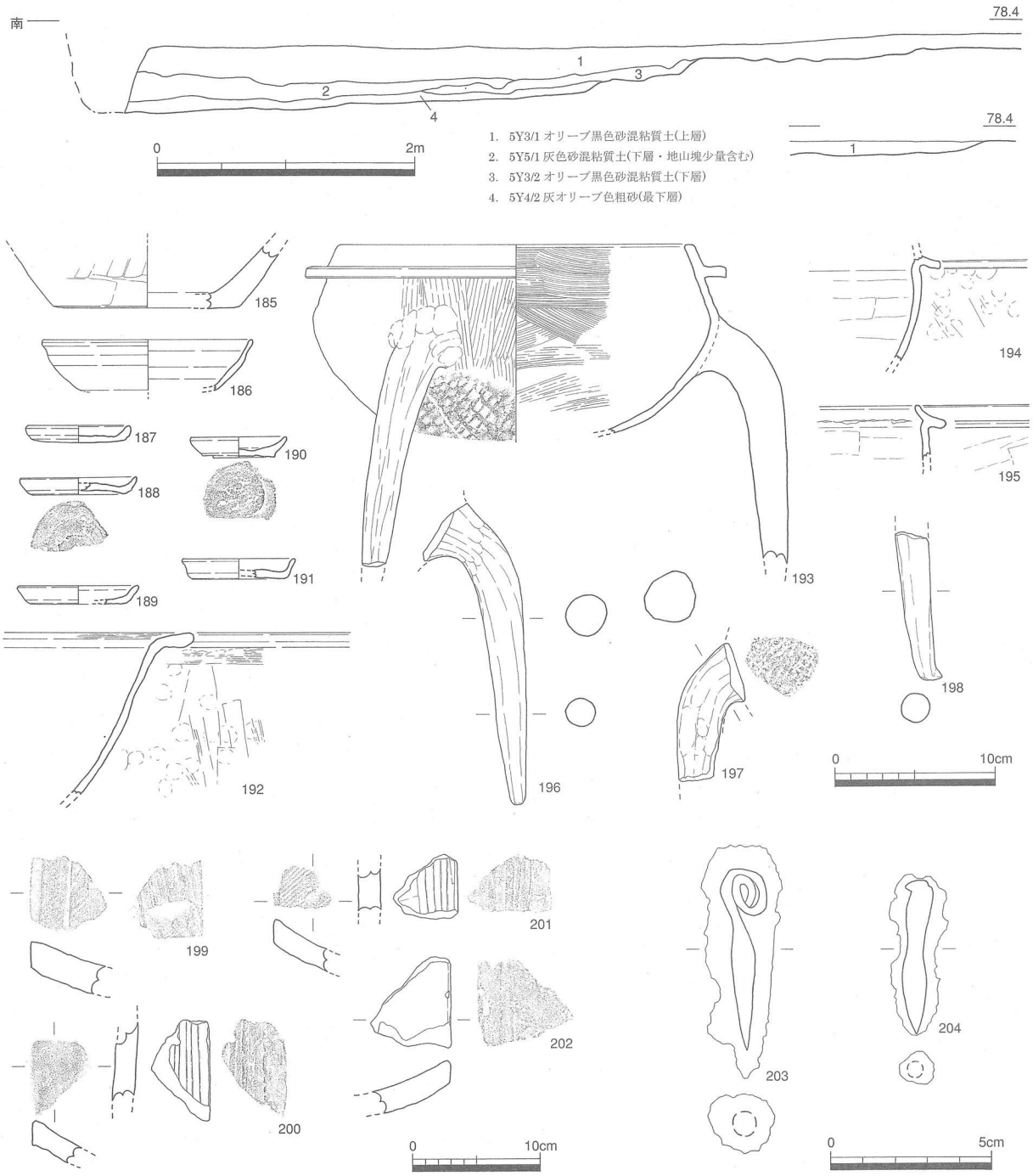


第32図　SX04平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

SX08（第33図）

SX08はＩＣ区の南西隅付近で検出した不整形な落ち込みである。検出長13.0m、幅4.8m、深さ0.5mを測り、その輪郭は等高線に沿って緩い弧を描いている。この部分の西側の地形を見ると氾濫原が丘陵裾部を弧状に抉り込んでおり、SX08の輪郭はこの抉り込みの方向と一致している。このことからSX08は地形に沿った落ち込みであると言える。埋土は上下２層に大別できるが、下層上面の粘質土には地山土層の塊が少量ながら含まれており、人為的に整地された可能性もある。

出土遺物は、上層からは土師器・須恵器・青磁・瓦・金属器が出土しているのに対して、下層からは弥生土器破片がごく少量出土しているに過ぎない。185は須恵器こね鉢の底部である。焼成はやや甘く瓦質となっている。186は土師器杯である。内弯気味に立ち上がる口縁部をもつもので12世後半に位置付けられる。187～191は土師器小皿である。口縁部の傾きや底部の凹凸などに若干の差異はあるものの、いずれも短く折り曲げた口縁部を有し、底部は回転ヘラ切りである。13世紀代に位置付けられる。192は土師器土鍋である。折り曲げた口縁部は水平に近くなっており、外面には炭が付着している。13世紀代に位置づけられる。193～198は土師器足釜である。193は口縁部からやや下位に水平な鍔部を有するもので、13世紀代に位置付けられる。鍔部下面には炭化物が付着



第33図　SX08断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/4、1/5)

している。194・195は口縁部と鍔部が一体になったもので、14世紀代の年代が想定される。どちらも鍔部下面に炭化物が付着している。196～198は土師器足釜の脚部である。197は胴部との接合を強固にする目的で、接合面にタタキ目を施している。199～202は平瓦である。凹面には布目圧痕、凸面には並行する板状圧痕が残る瓦質焼成の瓦で、中世に属するものと想定される。203・204は鉄製品である。203は一端は尖っているが、反対側は渦巻き状を呈するもので用途は不明である。204は短い鉄釘で頭部が変形している。

以上の遺物の特徴から、SX08が埋没を開始したのは弥生時代まで遡る可能性を残すものの、中

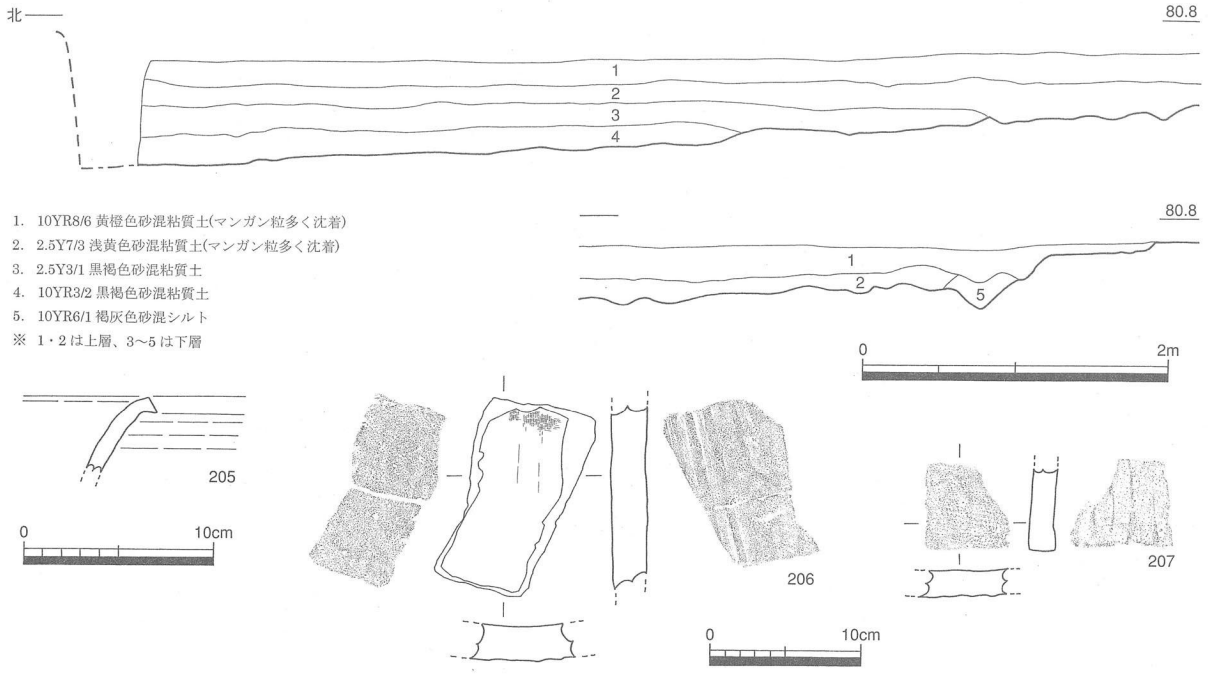
世（12世紀後半～13世紀代）にほぼ埋没したものと見られる。遺構の重複状況からはSX08の埋没後に掘立柱建物跡SB02や溝状遺構SD17などが作られたことがわかる。

SX09（第34図）

SX09はⅡB区北西隅付近で検出した不整形な落ち込みである。検出長18.2m、幅7.4m、深さ0.7mを測り、その輪郭は等高線にほぼ沿っている。調査時は谷地形と称していたが、南東から延びてきた丘陵の傾斜変換点付近に当たることから凹地状の落ち込みであったと思われる。隣接するⅡA区やⅠC区ではこの続きは確認できていないことから、その規模は小さなものであったと想定される。埋土は上下2層に大別することができる。東端付近で自然河川跡SR01と重なっているが、層位の観察からSX09の埋没途中にSR01が機能・埋没し、最終的には中世の遺物を含んだSX09の上層がSR01を含めた全体を覆っていることがわかる。

下層の黒褐色粘質土中からの遺物は僅少で、サヌカイト片1・安山岩片1・自然木があるに過ぎない。上層の黄色系砂混粘質土からは須恵器・土師器・瓦が出土している。205は須恵器甕である。外反する口縁部の破片で、端部下端を鋭角に摘み出しており、10世紀代に位置付けることができる。混入品と考えられる。206・207は平瓦である。どちらも凸面には並行する板状圧痕が残る。焼成は甘く軟質（瓦質）をしている。この他に図化できなかったが土師器足釜の脚部や格子タタキ目を持つ須恵器甕の破片などが出土しており、上層出土遺物の年代は13世紀代を中心とした中世に位置付けることができる。

遺物の年代観から、SX09は埋没開始時期がはっきりしないものの、13世紀代にほぼ埋没したことがわかる。また、上層中に混入した古代の遺物は周辺に当該期の遺構の存在を示唆するものとして注意が必要である。

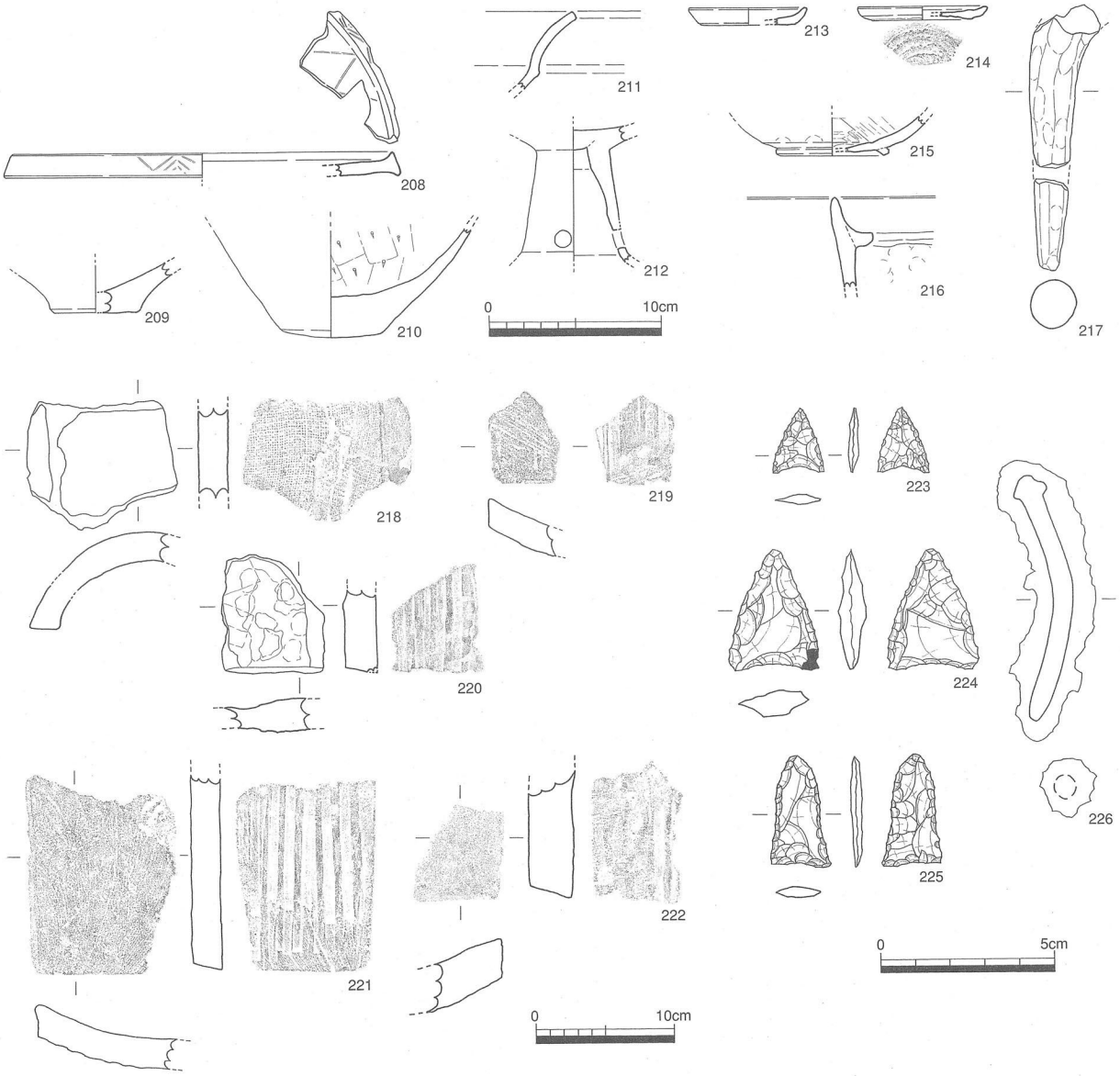


第34図　SX09断面図(1/50)、出土遺物(1/4、1/5)

3．出土遺構不明の遺物

第35図は、発掘途上の段階で出土・採取した出土遺構・地点が不明瞭な遺物の一部を図化したものである。羽間遺跡では遺物包含層が認められないことから、これらは基本的に遺構中から出土したものと言える。

208・209は弥生土器の壷である。208は口縁端部を上下に拡張して山形文を施しており、口縁部内面にも鋸歯文を施している。弥生時代後期前半代に位置付けられる。209はやや突出気味の平底をした壷の底部である。210は弥生土器甕の底部でやや丸味を帯びた平底を呈している。211・212は弥生土器高杯である。211は屈曲し外反気味の口縁部をもつ杯部である。212は脚部の中位から外方へ屈曲して開く形態で、杯部との接続は円盤充填によっている。屈曲部直上に3個の穿孔をもつ。208を除くこれらの弥生土器は、その形態から弥生時代後期後半に位置付けられる。213・214は土師器小皿である。短い口縁部をもつもので、底部は回転ヘラ削りが認められる。215は須恵器椀の底部で内弯する体部に貼り付け高台が付く。216・217は土師器足釜である。216は口縁部からやや



第35図　出土遺構不明の遺物（1/2、1/4、1/5）

下がった位置に短い鍔部を有する。217は足釜の脚部である。これらの土師器・須恵器の年代は、その形態的特徴から13世紀代に位置付けられる。218～222は瓦である。218は軟質焼成の丸瓦で凹面には布目圧痕が明瞭に残る。219～222は凸面に並行する板状圧痕が残る平瓦である。221は凹面に糸切りを施したような痕跡が残る。焼成は219が須恵質である以外はすべて焼成の甘い軟質である。223～225はサヌカイト製の打製石鏃である。223・224は三角形をした凹基式のもので、224はかなり大型化している。225は縦長のくさび形をした凹基式の石鏃である。いずれも弥生時代に属するものであろう。226は鉄製品で、先端が尖り、反対側の端部が分厚くなっている形状から鉄釘と判断できる。おおきく湾曲して先端を欠損していることは使用によるものと考えられる。

第４章　まとめ

第１節　遺構の変遷

「第３章　第３節　遺構・遺物」では、時代ごとに検出した遺構・遺物について説明した。これらのデータを基に羽間遺跡の時期別の変遷を明らかにしたい。なお、出土遺物がないために直接時期比定ができなかった遺構については検出方位、位置、他の遺構との先後関係を考慮して該当時期を推定したものもある。

第１期　縄文時代（第36図）

この時期の遺構は、ⅡＡ区において確認した自然河川４条があげられる。これらは中津山の西麓に存在する小開折谷の中を流下していた自然河川であると想定することができる。自然河川の中からは遺物が出土していないが、弥生時代の遺構面である黄灰色粘質土中に埋没していることから、当該期に属するものと判断しておく。また、弥生時代後期の溝状遺構 SD01内から出土した縄文土器は上流からの流入による二次的な堆積の可能性が高く、対象地内において人の営みを窺い知ることはできない。逆に、これらの土器は羽間遺跡の東方の中津山丘陵上に縄文時代後期前半の遺跡が存在する可能性を示唆するものと評価できる。

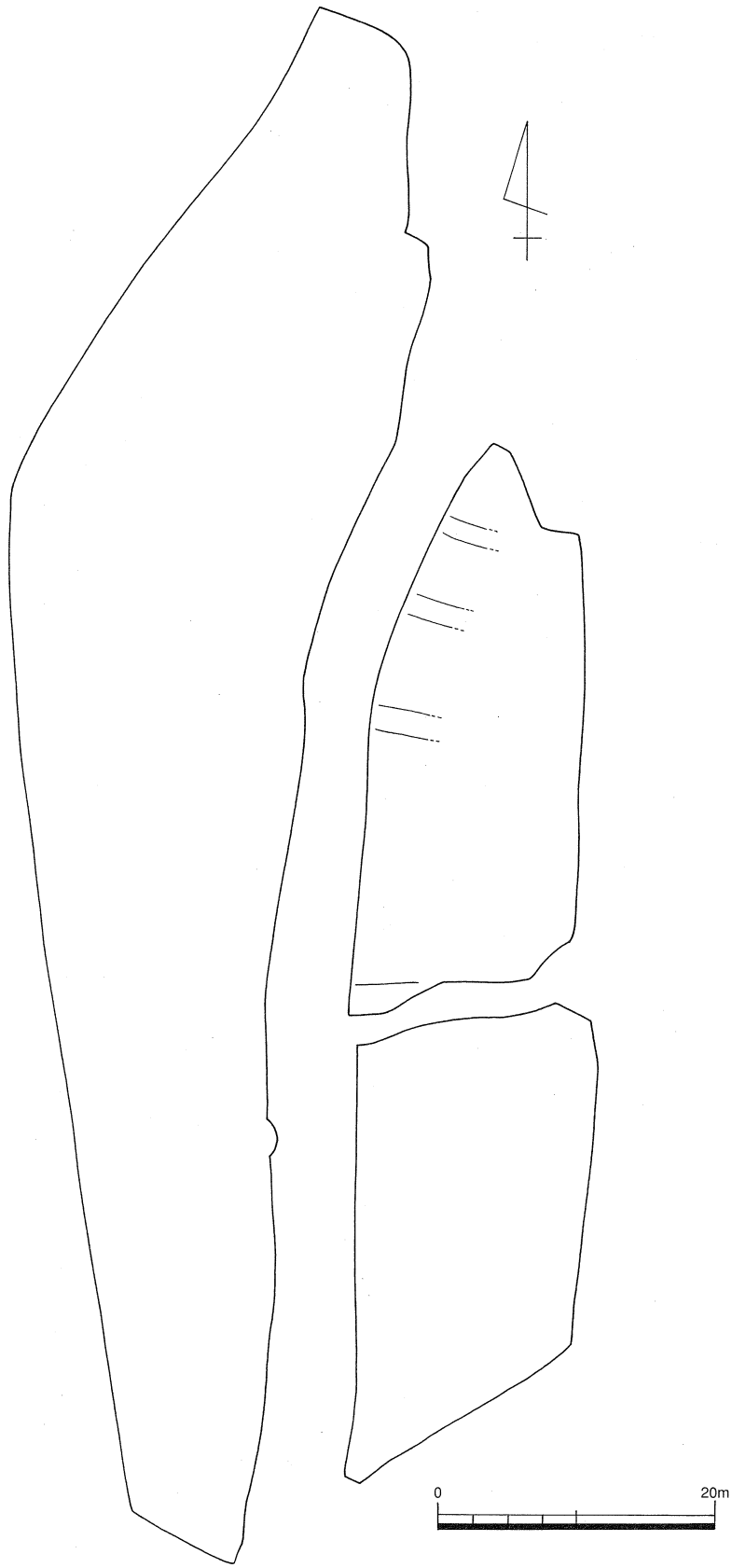
第２期　弥生時代後期～古墳時代前期（第37図）

この時期の遺構は、数は少ないながらも調査区全体に散在的に分布する状況を示す。ＩＡ・Ｂ区において竪穴住居跡 SH01・SH02の２棟と掘立柱建物跡 SB01の１棟が認められるが、先述したように SH02と SB01は近接し過ぎており、同時併存の可能性は低く、むしろ SH01と SB01のセットが同時併存した可能性が高い。ＩＤ区北端で検出した溝状遺構 SD22は水路としての機能よりも、南側に張り出した丘陵と合わせて区画を目的とした可能性が高い。すなわち、両者によって区画された緩斜面地に竪穴住居１棟と掘立柱建物１棟、井戸、土坑で構成される小集落が営まれたと言える。中央を東西に流れる溝状遺構 SD01は、前代以前に埋没した小開折谷の上に位置していることから、湧き水を西方の氾濫原へ落として、集落内を乾燥させることを目的とした溝と捉えられる。竪穴住居跡 SH01は放棄に際して住居内を片付けてから火をかけた可能性があり、土器類は SD22に廃棄された状況が想定できる。こうしてこの小集落はいったん姿を消すが、あまり期間を空けずに、溝状遺構 SD01の埋没後に竪穴住居跡 SH02が作られている状況が窺える。しかし他に建物は確認できず、集落として再興・発展した形跡は認められない。ＩＤ区で検出した微凹地 SX07からは弥生後期後半の土器に混じって、少量の古墳時代前期の土師器が出土しており、この時期が最終的な集落の廃絶時期と判断できる。

第３期　中世（第38図）

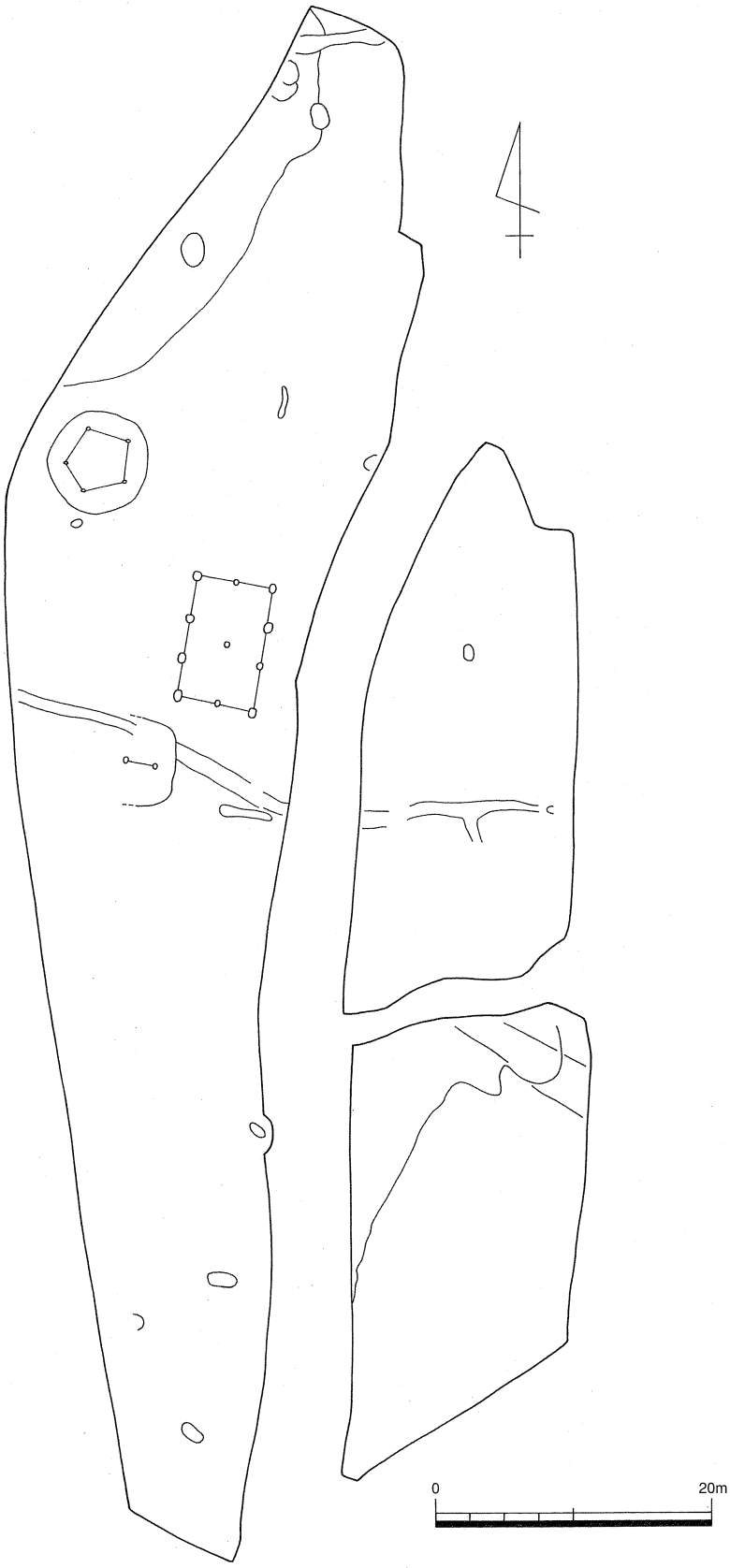
この時期の遺構は、前代に比較して数が減り、調査区中央と南端（ＩＣ区）に集中する傾向を見せる。掘立柱建物跡１棟と数条の溝状遺構、不明遺構などがある。建物遺構は掘立柱建物跡 SB02のみであり、矮小な段丘上の西端に位置していることから集落の一部とするよりは、単発的な遺構であると想定される。微凹地 SX08の埋没後に建てられているが、SX08の土層には地山ブロックを含む層も認められることから、SB02の建築に際して微凹地を人為的に埋め戻して整地した可能性がある。SB02は溝状遺構 SD13や SD10などと重複した位置関係にあり、時期差を有することは確実であるがその先後関係については判明しない。これらの調査区南端（ＩＣ区）に集中する遺構は、土器川を挟んで対岸に現在も見られる条里地割の方向とほぼ一致している特徴をもつ。これに対し

縄文時代

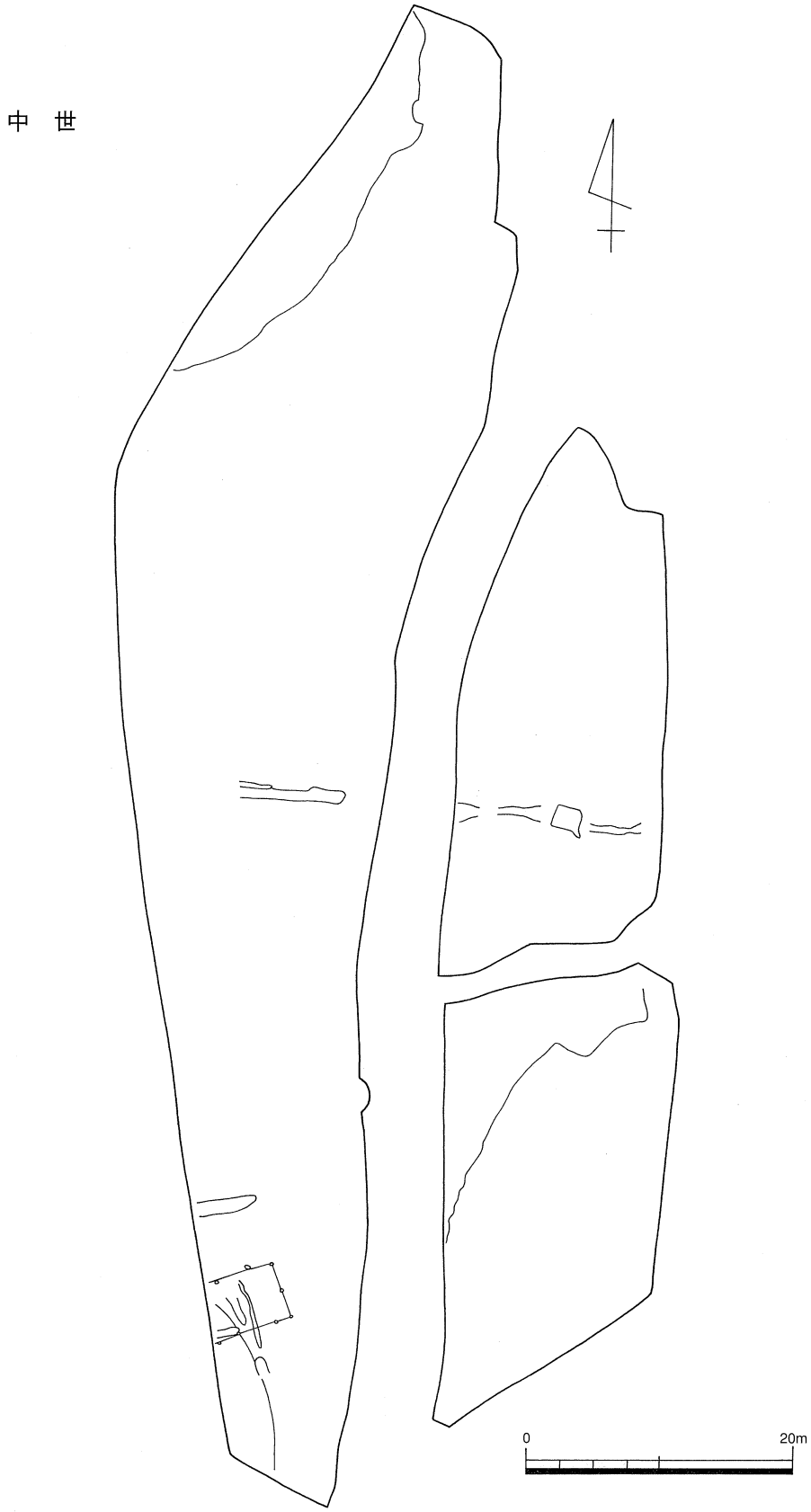


第36図　遺構変遷図①

弥生時代



第37図　遺構変遷図②



第38図　遺構変遷図③

調査区中央を東西に流れる溝状遺構SD23はほぼ東西方向を示している点が異なる。前代に見られた湧水を流す目的を持った溝状遺構SD01とほぼ同じ位置にあることから、当該期においても同じ機能を果たしていたものと思われる。条里地割よりも自然地形を優先した結果が溝の方向に現れたものと考えられる。調査区の北端（ＩＤ区）やⅡＢ区に認められた微凹地（SX07・09）が最終的な埋没を迎えるものこの段階である。

以上のように、羽間遺跡は第２期（弥生時代後期）に営まれた小集落が主体を占めた遺跡と言える。当該期の集落には、各地域の拠点的集落となり得るような規模の大きな集落と数棟の建物からなる小規模な集落が存在することが判明している。羽間遺跡の弥生時代集落は後者の小規模集落に相当する。鉄器使用の普及などによる可耕地の拡大が生み出した米の生産量の増加に起因する人口増加によって過密となった大規模集落を離れて、新たなる可耕地を切り開くために営まれた村として捉えることができる。その開墾のターゲットはすでに河床が定まった土器川と羽間遺跡の間に広がる旧氾濫原であったことは容易に想像できる。しかし、その旧氾濫原は粗粒灰色低地土壌で表土層直下に砂礫が見られる土壌と水田耕作には適さなかったため、他の可耕地を求めて移動して行った結果、羽間遺跡の弥生時代集落は短期間で廃絶したと理解できる。

第２節　掘立柱建物跡SB01について

ＩＢ区で検出した弥生時代後期の掘立柱建物跡SB01は、床面積が50.1㎡を測る規模の大きな建物で、両梁間及び建物中央に棟持柱を有している点が特徴的である。これまでの発掘調査によって、香川県下では100例を超える弥生時代の掘立柱建物跡の検出例が確認されてきているが、羽間遺跡が所在する丸亀・善通寺平野周辺においては棟持柱を有する掘立柱建物跡は非常に数が少なく、弥生時代中期後半に属する西碑殿遺跡（善通寺市碑殿町）SB22と弘田川西岸遺跡（善通寺市善通寺町）Ⅱ区SB01(註1)の２例を挙げることができるに過ぎない。しかも、西碑殿遺跡SB22は片側の梁間にしか棟持柱は確認できておらず、後世の削平によって消失したものかあるいは元来存在しなかったものかについては、現時点では判断できない。弘田川西岸遺跡Ⅱ区SB01は梁間の外側に独立した棟持柱をもつもので柱穴跡の掘り方は平面方形を呈する。これらは両者とも弥生時代中期後半の例であり、弥生時代後期前半においても棟持柱を有した掘立柱建物跡は確認できていない。さらに、弥生時代後期後半には掘立柱建物跡の検出例そのものが無いのが現状である。

一方、高松平野以東の地域に目を向けると、わずかではあるが棟持柱を有した掘立柱建物跡の例が存在する。弥生時代後期前半の寺田・産宮通遺跡（さぬき市寒川町）SB15、弥生後期後半の鹿伏・中所遺跡（木田郡三木町）SB04(註2)などを挙げることができる。これらの掘立柱建物跡は梁間の中央に棟持柱が存在し、柱穴は小規模な平面円形を呈しているという共通点を有しており、同一の系譜に属する可能性が高い。

つまり、弥生時代後期の棟持柱を有する掘立柱建物跡の存在に関しては、香川県の東の地域と西の地域では地域差が存在すると換言することができる。同時代性という点を重視すれば、羽間遺跡の掘立柱建物跡SB01は高松平野以東の地域からの影響を受けて丸亀・善通寺平野周辺に初めて出現した棟持柱を有する掘立柱建物跡と位置付けることは可能であろう。ただし、構造的には羽間遺跡SB01には建物中央にも棟持柱と想定される柱穴跡が存在している点が決定的に異なっており、単純に東方からの直接の影響とするにはまだ躊躇がある。また、寺田・産宮通遺跡では当該期に特徴的な土器群である「下川津Ｂ類」土器が検出されているのに対して羽間遺跡では確認できない(註3)など、土器の様相にも違いが認められる。

なお、土器といえば、微凹地SX07から出土した弥生土器支脚（第23図166）は2本の指が前方に伸びる形態のものであるが、同様の支脚は愛媛県を中心とした分布が知られており、この支脚に関しては西方からの影響も想定される。このことも単純に東方からの影響であることに踏み切れない傍証である。羽間遺跡の掘立柱建物跡SB01の系譜などについては、高松平野から羽間遺跡までの間の地域における掘立柱建物跡の出土例の増加に期待したい。

＜註＞

註1：弘田川西岸遺跡　平成7年度概報での遺構番号であり、今後予定している整理作業によって遺構番号が変更される可能性があるので注意されたい。

註2：鹿伏・中所遺跡　平成6年度概報での遺構番号であり、今後予定している整理作業によって遺構番号が変更される可能性があるので注意されたい。

註3：確実に「下川津B類」と確認できる土器資料はない。小破片のためはっきりしないが、SE02出土の弥生土器高杯口縁部（第17図57）がその可能性があるのみである。

＜参考文献＞

・香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター他
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第10冊　金蔵寺下所遺跡　西碑殿遺跡』1994.3

・香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター他
『中小河川大束川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津元結木遺跡』1992.1

・香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター他
『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第4冊　空港跡地遺跡Ⅳ』2000.3

・香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター他
『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成5年度』1994.3

・香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター他
『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成8年度』1997.3

・香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター
『弘田川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　弘田川西岸遺跡　平成7年度』1996.3

・香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター他
『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成12年度』2001.3

・香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター
『県道富田西志度線道路改良事業及び県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
寺田・産宮通遺跡　南天枝遺跡』2003.3

・香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター
『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　多肥松林遺跡　鹿伏・中所遺跡　平成6年度』1995.3

・香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター
『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　鹿伏・中所遺跡　平成7年度』1996.3

・満濃町・満濃町誌編さん委員会・満濃町誌編集委員会『新修　満濃町誌』2005.5

報告書遺構番号	旧遺構番号
SH01	ⅠA区SH01
SH02	ⅠB区SH01
SP001	ⅠA区SP01
SP002	ⅠA区SP02
SP003	ⅠA区SP03
SP004	ⅠA区SP04
SP005	ⅠA区SP05
SP006	ⅠA区SP06
SP007	ⅠA区SP07
SP008	ⅠA区SP09
SP009	ⅠA区SP11
SP010	ⅠA区SP14
SP011	ⅠA区SP16
SP012	ⅠA区SP17
SP013	ⅠA区SP18
SP014	ⅠA区SP19
SP015	ⅠA区SP20
SP016	ⅠA区SP21
SP017	ⅠA区SP22
SP018	ⅠA区SP23
SP019	ⅠA区SP24
SP020	ⅠA区SP25
SP021	ⅠA区SP26
SP022	ⅠA区SP27
SP023	ⅠA区SP28
SP024	ⅠA区SP29
SP025	ⅠA区SP31
SP026	ⅠA区SP32
SP027	ⅠA区SP33
SP028	ⅠA区SP34
SP029	ⅠA区SP35
SP030	ⅠA区SP36
SP031	ⅠA区SP37
SP032	ⅠA区SP38
SP033	ⅠA区SP39
SP034	ⅠA区SP40
SP035	ⅠA区SP41
SP036	ⅠA区SP42
SP037	ⅠA区SP43
SP038	ⅠA区SP44
SP039	ⅠA区SP45
SP040	ⅠA区SP46
SP041	ⅠA区SP47
SP042	ⅠA区SP48
SP043	ⅠA区SP49
SP044	ⅠA区SP50
SP045	ⅠA区SP51
SP046	ⅠA区SP52
SP047	ⅠA区SP53
SP048	ⅠA区SP54
SP049	ⅠB区SP01
SP050	ⅠB区SP02
SP051	ⅠB区SP03
SP052	ⅠB区SP04
SP053	ⅠB区SP05
SP054	ⅠB区SP06
SP055	ⅠB区SP07
SP056	ⅠB区SP11
SP057	ⅠB区SP12
SP058	ⅠB区SP13
SP059	ⅠB区SP14
SP060	ⅠB区SP15
SP061	ⅠB区SP16
SP062	ⅠB区SP17
SP063	ⅠB区SP18
SP064	ⅠB区SP19
SP065	ⅠB区SP20
SP066	ⅠB区SP21
SP067	ⅠB区SP22
SP068	ⅠB区SP23
SP069	ⅠB区SP24
SP070	ⅠB区SP25
SP071	ⅠB区SP26
SP072	ⅠB区SP27
SP073	ⅠB区SB01-P1
SP074	ⅠB区SB01-P2
SP075	ⅠB区SB01-P3
SP076	ⅠB区SB01-P4
SP077	ⅠB区SB01-P5
SP078	ⅠB区SB01-P6
SP079	ⅠB区SB01-P7
SP080	ⅠB区SB01-P8
SP081	ⅠB区SB01-P9
SP082	ⅠB区SB01-P10
SP083	ⅠC区SP01
SP084	ⅠC区SP03
SP085	ⅠC区SP04
SP086	ⅠC区SP05
SP087	ⅠC区SP06

報告書遺構番号	旧遺構番号
SP088	ⅠC区SP07
SP089	ⅠC区SP08
SP090	ⅠC区SP09
SP091	ⅠC区SP10
SP092	ⅠC区SP11
SP093	ⅠC区SP12
SP094	ⅠC区SP13
SP095	ⅠC区SP14
SP096	ⅠC区SP15
SP097	ⅠC区SP16
SP098	ⅠC区SP17
SP099	ⅠC区SP18
SP100	ⅠC区SP19
SP101	ⅠC区SP20
SP102	ⅠC区SP21
SP103	ⅠC区SP22
SP104	ⅠC区SP23
SP105	ⅠC区SP24
SP106	ⅠC区SP25
SP107	ⅠC区SP26
SP108	ⅠC区SP27
SP109	ⅠC区SP28
SP110	ⅠC区SP29
SP111	ⅠC区SP30
SP112	ⅠC区SP31
SP113	ⅠC区SP32
SP114	ⅠC区SP33
SP115	ⅠC区SP34
SP116	ⅠC区SP35
SP117	ⅠC区SP36
SP118	ⅠC区SP37
SP119	ⅠC区SP38
SP120	ⅠC区SP39
SP121	ⅠC区SP40
SP122	ⅠC区SP41
SP123	ⅠC区SP42
SP124	ⅠC区SP43
SP125	ⅠC区SP44
SP126	ⅠC区SP45
SP127	ⅠC区SP46
SP128	ⅠC区SP47
SP129	ⅠC区SP48
SP130	ⅠC区SP49
SP131	ⅠC区SP50
SP132	ⅠC区SP51
SP133	ⅠC区SP52
SP134	ⅠC区SP53
SP135	ⅠC区SP54
SP136	ⅠC区SP55
SP137	ⅠC区SP56
SP138	ⅠC区SP57
SP139	ⅠC区SP58
SP140	ⅠC区SP59
SP141	ⅠC区SP60
SP142	ⅠC区SP61
SP143	ⅠC区SP62
SP144	ⅠC区SP63
SP145	ⅠC区SP64
SP146	ⅠC区SP65
SP147	ⅠC区SP66
SP148	ⅠC区SP67
SP149	ⅠC区SP68
SP150	ⅠC区SP69
SP151	ⅠC区SP70
SP152	ⅠC区SP71
SP153	ⅠC区SP72
SP154	ⅠC区SP73
SP155	ⅠD区SP01
SP156	ⅠD区SP02
SP157	ⅠD区SP03
SP158	ⅠD区SP04
SP159	ⅠD区SP05
SP160	ⅠD区SP06
SP161	ⅠD区SP07
SP162	ⅠD区SP08
SP163	ⅠD区SP09
SP164	ⅠD区SP10
SP165	ⅠD区SP11
SP166	ⅠD区SP12
SP167	ⅠD区SP13
SP168	ⅠD区SP14
SP169	ⅡA区SP01
SP170	ⅡA区SP02
SP171	ⅡA区SP03
SP172	ⅡA区SP04
SP173	ⅡA区SP05
SP174	ⅡA区SP06
SP175	ⅡA区SP07
SP176	ⅡA区SP08

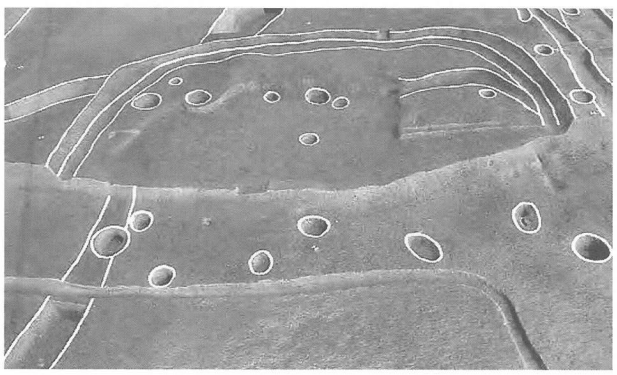
報告書遺構番号	旧遺構番号
SP177	ⅡA区SP09
SP178	ⅡA区SP10
SP179	ⅡA区SP11
SP180	ⅡA区SP12
SP181	ⅡA区SP13
SP182	ⅡA区SP14
SP183	ⅡA区SP15
SP184	ⅡA区SP16
SP185	ⅡA区SP17
SP186	ⅡA区SP18
SP187	ⅡA区SP19
SP188	ⅡA区SP20
SP189	ⅡA区SP21
SP190	ⅡA区SP22
SP191	ⅡA区SP23
SP192	ⅠA区SH01上面 SP01
SP193	ⅠA区SP08
SP194	ⅠA区SP10
SP195	ⅠA区SP15
SK01	ⅠA区SK02
SK02	ⅠA区SK03
SK03	ⅠA区SK04
SK04	ⅠB区SK01
SK05	ⅠB区SK02
SK06	ⅠB区SK03
SK07	ⅠB区SK04
SK08	ⅠC区SK01
SK09	ⅠC区SK02
SK10	ⅠC区SK03
SK11	ⅠC区SK04
SK12	ⅠC区SK05
SK13	ⅠC区SK06
SK14	ⅠC区SK07
SK15	ⅠC区SK08
SK16	ⅠD区SK02
SK17	ⅡA区SK01
SK18	ⅡA区SK02
SK19	ⅡB区SK01
SK20	ⅠA区SH01上面 SK01
SE01	ⅠD区SE01
SE02	ⅠD区SK01
SX01	ⅠC区SX01
SX02	ⅡA区SX01
SX03	ⅡA区SX02
SX04	ⅡA区SX03
SX05	ⅡA区SX04
SX06	ⅡA区SX05
SX07	ⅠA区落ち込み
SX07	ⅠD区落ち込み
SX08	ⅠC区谷地形
SX09	ⅡB区谷地形
SD01	ⅠA区SD03
SD01	ⅠB区SD03
SD01	ⅡA区SD03
SD02	ⅠB区SD01
SD03	ⅠB区SD02
SD04	ⅠB区SD03
SD05	ⅠB区SD04
SD06	ⅠB区SD05
SD07	ⅠB区SD06
SD08	ⅠB区SD07
SD09	ⅠC区SD01
SD09	ⅠC区SD02
SD10	ⅠC区SD03
SD11	ⅠC区SD04
SD12	ⅠC区SD05
SD13	ⅠC区SD06
SD14	ⅠC区SD07
SD15	ⅠC区SD08
SD16	ⅠC区SD09
SD17	ⅠC区SD10
SD18	ⅠC区SD11
SD19	ⅠC区SD12
SD20	ⅠC区SD13
SD21	ⅠC区SD14
SD22	ⅠD区SD01
SD23	ⅡA区SD01
SD24	ⅡA区SD02
SD25	ⅡA区SD03
SD26	ⅡA区SD04
SD27	ⅡA区SD05
SR01	ⅡA区自然流路 1
SR01	ⅡB区自然流路
SR02	ⅡA区自然流路 2
SR03	ⅡA区自然流路 3
SR04	ⅡA区自然流路 4

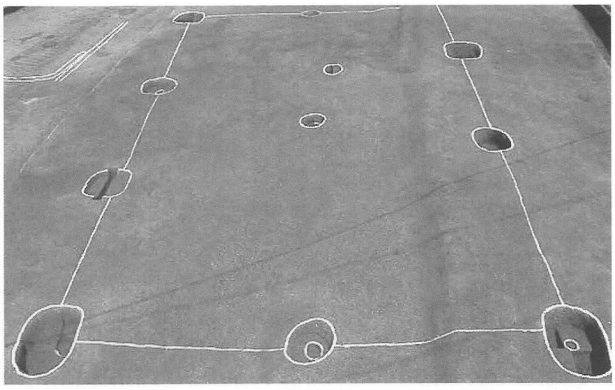
※SB01・02は SP に含まれている。

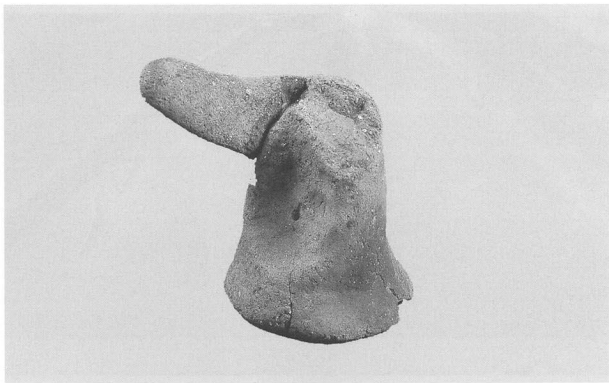
第 3 表　羽間遺跡新旧遺構名対照表

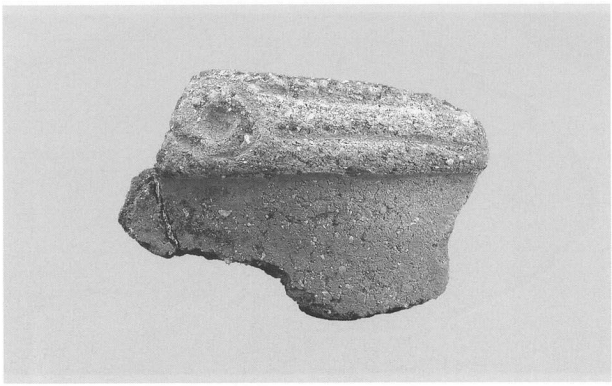
Y=133.180
Y=133.160
Y=133.140
Y=133.120
Y=133.200
X=32.200
X=32.180
X=32.160
0
10m

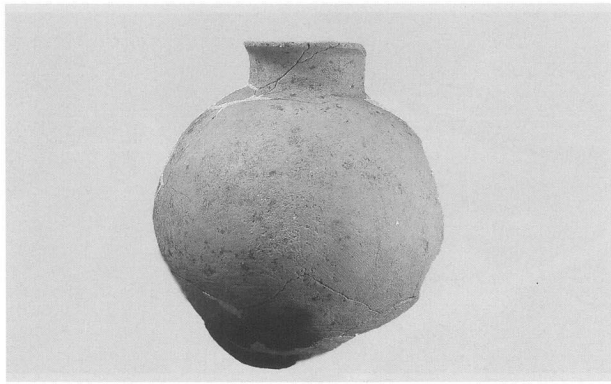
第39図　遺構配置図

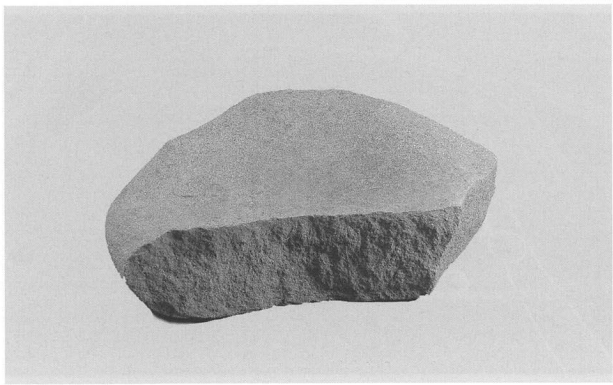


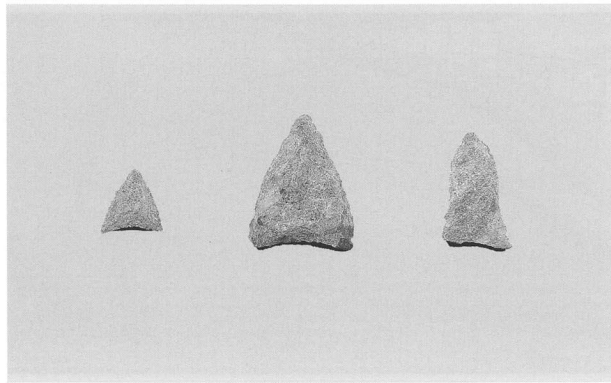












報告書抄録

ふりがな	はざまいせき
書名	羽間遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第2冊
編著者名	宮﨑哲治
編集機関	香川県埋蔵文化財センター
所在地	〒762-0024　香川県坂出市府中町字南谷5001-4　　TEL.0877-48-2191(代)
発行機関	香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局
発行年月日	2007(平成19)年3月30日

総頁数	目次等	本文	観察表	図版	挿図枚数	写真枚数	付図枚数	CD-ROM枚数
54P	8P	46P	(CD収録)	(CD収録)	39P	259枚	なし	1枚

所収遺跡名(ふりがな)	所在地(ふりがな)	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
羽間遺跡(はざまいせき)	香川県(かがわけん) 仲多度郡(なかたどぐん) まんのう町(ちょう)	37406		34度 10分 25秒	133度 51分 00秒	2005.5.1 ～ 2005.9.30	3,750	国道32号満濃バイパス

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
羽間遺跡	集落	弥生時代後期	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝状遺構	弥生土器・石器	掘立柱建物跡(棟持柱)
		中世	掘立柱建物跡・溝状遺構・柱穴跡	須恵器・土師器・瓦類	

一般国道32号満濃バイパス建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊

羽間遺跡

平成19年３月30日　発行

編集　香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024　香川県坂出市府中町南谷5001-4
電話（0877)48-2191（代表）
発行　香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局
印刷　株式会社 成光社